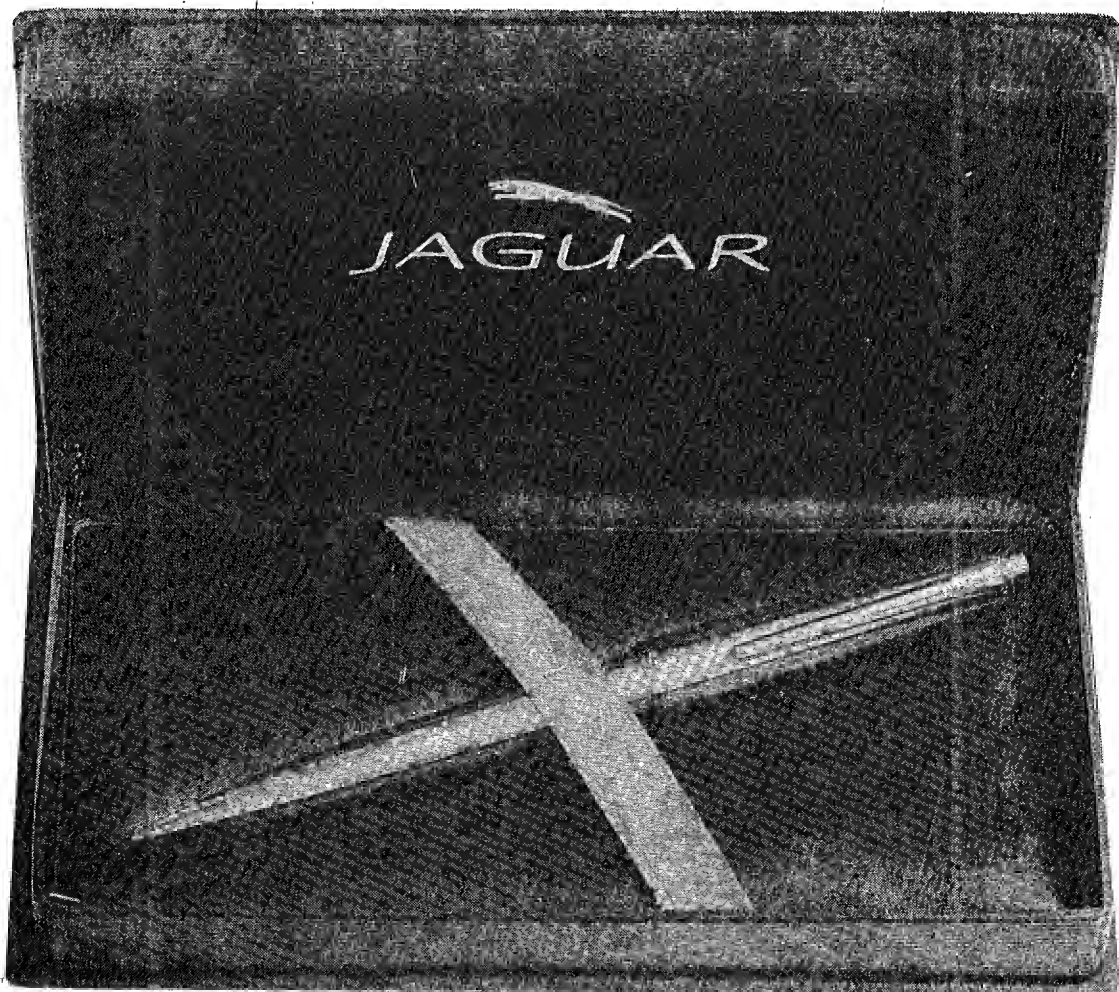


精かんなきみから
精かんな かれへ**贈りものはジャガー**

胸から出す、ノックする、書く………
三菱ボールペン《ジャガー》は、すべてに
スキがありません。
スマートなデザイン、軽快なキャップ
スライド、ムラのない書き味《ジャガー》
は、行動的な若いあなたに、ぴったりです

精悍なヤツ——
ジャガー
三菱ボールペン
¥2000・¥1000・¥800・¥500

"ミュンヘン"への道

フランスにおける世界選手権ももう百日余に迫った。

月日のたつのは早いもので、全日本の第1次候補選手が選考されもう一年がすぎようとしている。ヨーロッパ遠征ということをやりとげ選手は大きく成長したようである。秋の深まりとともによせられるヨーロッパ球界の情報は、各国が強化に懸命であることを伝えている。

強豪はますます自分の力を貯えようとし、新興国は強国からコーチを招き、強豪の一角を崩そうとしている。

一年がまたたくまであったように、"72年のミュンヘン"は眼の前に迫っている。

世界選手権がおわったなら、すぐに、否おわる前にいますぐからでも、72年に備える用意をしておかなければならない。これは単に選手だけの問題でなく日本ハンドボール界としての問題である。

選手団に心おきなくプレーしてもらえるように、まず国内体制固めをしなければなるまい。

特に、財源問題は重要であるハンドボールの潜在的な観衆は決っして少なくはない筈である

現在、日本にチームは千五百近くある。一チーム内輪に見て十人としても現役が一万五千人それに数倍するOBがいる筈である。このように考えるならば数十万人のかってハンドボールを競技として行なった人々が日本にはいるわけだ。

これらの人々を再び熱心なハンドボールファンとして、競技場にこさせるような手段を考え競技場を満員にし、多くの収入をあげるような形にしなければこの三十六年に一度のチャンスを生かすことにはならないだろう。

インカレが東京で行なわれても空席がめだつ、となりの屋体が満員であるに、やはり残念だ。競技場を一度に満員にしよとしてもしてもむりだ。一人一人の地味な努力が必要だ。

全国のハンドボールに現在関係している読者の皆さんが、一人でも多くのハンドボールOBを観衆として競技場につれもどす努力をしようではないか。そして、そのうえで、これまでハンドボールというものを見たこともない人も競技場につれだそうではないか。そして、広い底辺の上になった選手団をハンドボールファンの手でミュンヘンに送り出そうではないか（F）

時評

〇……すべてヨーロッパのシステムがよいというわけではないが、外国の球界事情を探ってみると全国組織を支えているのは地域組織―日本でいうところのブロックであることが判る。

日本協会の組織にもいちおうブロックという単位が置かれているのだが、あまり活用されていないのが現実だ。

〇……ブロックが有名無実に終っているのは、さらにその下に県組織があり、役員やプレイヤーの郷土意識があくまで県であって地域という感覚のうすいことも一因であろう。

しかし、せっかく全国9地域に統轄機関を設けているのならば、日本協会が積極的にこの組織を活かすよう施策すべきではなかろうか。

〇……ブロック協会が確立されれば中央からの伝達も極めてスピーディに処理されることになるし、逆に末端組織の現状を中央が吸いあげることも容易だ。

全国理事長会議という大規模な会合を開かなくてもブロック理事長会議で充分である。

〇……競技面でもブロックという単位をもっと重要視してもよいと思う。

それぞれ選手権を開いてはいるようだが、国体とか全日本総合の予選を兼ねている所が多く、厳密な意味でその地域のチャンピオンチームを決めるという内容ではない。筆者の知る限りで名実ともに地域選手権と呼べるのは「東北総合室内」（昭和39年度から）と「東海総合室内」（昭和36年度から）の2大会だけ。これに準じるものとして「中国選手権（一般）」と「九州選手権」があるだけだ。

〇……日本協会もこうした大会の育成を奨励すべきで、金銭的な援助が無理なら協会杯でも贈ることを考えたらどうだろう。

ブロックの再認識は懸案の全日本総合選手権改組にも一つのヒントを与えよう。例えば同選手権を16チームの争覇ということにすれば関東・東海・近畿・九州から各2、北海道・東北・北信越・中国・四国から各1それに開催地代表と前年度優勝チーム。このほか開催地の属するブロックにプラス1とするような案もたてられる。

〇……いずれにせよ、協会組織をより円滑化するために、ブロックの利点を改めて考える時期に来ている。ブロック役員名簿を整備するあたりから最初のステップを踏むよう提案したい（X）

「ハンドボール」12月号（第71号）目次

表紙写真・全日本対関東学生選抜戦（11月15日・駒沢屋内球技場）

ミュンヘン、16ヶ国で実施へ

女子の採用は不明確

かねてから論議の的になっていたミュンヘン・オリンピックにおけるハンドボールなど球技の参加国数問題について、IOC（国際オリンピック委員会）ブランデージ会長は、10月下旬ドブロフニク（ユーゴー）で開かれたIOC理事会ー各国オリンピック委員会（NOC）代表者会議の席上「球技参加国を8チームに削減する案は各国際競技連盟の反対が強いのでミュンヘン大会はメキシコと同じ方式にする」と言明した。ーこれは同会議に日本から出席した日本オリンピック委員会（JOC）役員の帰国談として伝えられたものである。

女子ハンドボールの採用についてはいぜん不明確。「男8女8」「男10女6」「男子16のみ」といった推測が相変らずとびかっているが、「男子8のみ」という説だけはうすくなったことになる。

すべてがはっきりするのは来年5月アムステルダム（オランダ）で開かれるIOC総会となろう。IHF（国際ハンドール連盟）はこの問題に関して公式見解をまだ示していないが来春フランスで開かれる第7回世界男子7人制選手権時になんらかの意思表示を行うだろうというみかたが強い。

あるいは来月に予定されるIHF技術委で基本案が話し合われるのではないかともみられる。

72年9月1日から7日間
ミュンヘン五輪のハンドボール日程

11月7日各報道機関が伝えたところによるとミュンヘンオリンピック組織委員はこのほど同大会の競技別日程を発表した。

それによるとハンドボールは9月1、2、3、5、6、7、9の7日間に予定されている。開会式は8月26日、閉会式は9月10日。なお、日本オリンピック委員会（JOC）が発表したミュンヘン・オリンピックの競技別要項によると、ハンドボールは16ヶ国の参加によって4ヶ国づつ4組の予選リーグ、各組1、2位（計8ヶ国）で準決勝リーグを行い、各組1位が決勝、各組2位が3位決定戦を争うことになっている。

来秋、西ドイツ（予定）を招待

ソビエトにも打診

日本協会では10月26、27日長崎市で開いた全国理事会、全国評議員会席上、来年度にヨーロッパの一流チームを招待親善試合を行うことに決めた。

現在、来日を希望しているヨーロッパチームはソビエト、西ドイツ、ルーマニアなどのほかフランス、ユーゴ、チェコのクラブチームから単独にその意向が伝えられている。

日本協会ではこのうち西ドイツを第一候補として交渉をはじめることになり、また数年前から交流の要望をしきりに伝えて来ているソビエトへも改めて打診を行うことになった。

西ドイツは、昭和31年に11人制のナショナルチーム、42年に7人制の選抜チームが女子ナショナルとともに来征してきており、交渉の窓口もはっきりしている。

また、来春から大阪で開かれる万国博らん会に西ドイツスポーツ代表団としてハンドボールチームが来日するという情報もあり、この件も合わせて西ドイツ協会へ問い合せることになった。

日本協会の構想では招へい期日は来年の9月、全国各地を3週間にわたって巡回、10試合を行いたいとしこのうち全日本との対戦（オフィシャルマッチ）を3試合予定している。

チームの構成はナショナルチームを第一希望として、同チームの編成が難しい場合（注・西ドイツは5～8月は11人制の公式シーズン）はそれに準ずるチーム。

ソビエトとの交流については、かなり以前から取り沙汰されていながらいっこうに具体化していないためこの際はっきりと線を打ち出すことになったものである。今夏渡欧した全日本選手団との話し合いでは来年8月の来日を希望していたという。日本側は、8月は全日本総合選手権、全日本高校選手権、全日本教職員選手権、国体各地予選などが重っているために難色を示している。9月あるいは6月ならば招待を実現してもよいハラだが、両会議ではあくまで西ドイツを第一候補とすることになった。

一部には西ドイツ、ソビエト、日本の3国対抗を9月にという意見もあるようだが諸般の情勢から来年度での実現はうすそうだ。

万国博らん会の親善使節として西ドイツハンドボールチームが来日するという話は、今のところ確証が得られず、来日しても、果して日本協会のたてたスケジュールにしたがう行動がとれるかどうか不明である。

韓国学生の来日は6月？

また、同席上日本協会と全日本学連による韓国学生チームを6月（予定）に招待することが明きらかにされた。

これは今年から再開された日韓学生交流で、相互に招待しあうという約束によるもの。全日本学連の意向は6月下旬から7月上旬にかけて、7～10日間に5～6試合である。

なお、第3回日韓高校スポーツ交歓競技会がソウルで8月に開かれればこれまでどおりハンドボールも行われることになろう。

IHF総会に代表派遣

2年に1度開かれる国際ハンドボール連盟（IHF）の通常総会は来年11月プラハ（チェコ）で行われるが、日本協会は代表2名（予定）を派遣することを決めた。ミュンヘン・オリンピックの予選問題などが協議されるとみられている。

全日本男子、関東学生選抜に連勝

世界選手権をめざす全日本代表第3次候補の強化試合は11月15日午後6時半から東京・駒沢屋内球技場に約一千の観衆を集めて関東学生選抜軍と2試合を行い全日本男子チームは順当に2勝をあげた

目立った防禦の固さ

第1試合、対関東学生選抜Bは池田鉄哉、藤原侑両氏審判で開始

全日本 27（14−6 13−5）11 関東学生選抜B

○……関東学生は立ちあがりから積極的に攻めたが加藤、荒井のシュートをGK下里に阻まれ先制できなかった。

じっくりパスをまわす全日本は3分と5分木野の好配球で東がポストからゴールを決めリード、それ以後は1分おきに加点、なんとか食い下ろうとする関東学生を突きはなした。

○……全日本のプレーはかなり技巧的で、長身者を揃えたわりに豪快な味のある展開が少かった。これはコーチングスタッフが「速いプレー」をチーム造りの柱にしているためで、対ヨーロッパ戦用の策戦としては当を得ていると思う

この試合では、全日本の速い動きに関東学生のディフェンスがワンテンポ遅れ、かえって陣形が大きく崩れなかったために、そこへパスがリターンされて封じこまれるという〝奇妙な結果〟になる場面が再三あり、真価を発揮するまでにはいたらなかったが、一応の成果をあげていたようだ。シュート率は60％（シュート数47）。

○……目立ったのは相手のシュートに対する防禦が強くなったことだ。

関東学生の得点は、ほとんど荒井、花輪らのタイミングをはずした巧妙な個人技によるもので、正面、サイドを問はずまともに射ったシュートの大半はディフェンスラインによってはじきかえされた。

また、GK陣が自信にあふれたプレーを見せたのも注目された。小がらなテクニシャンの多い相手だけに、これをそのまま守備力向上と評価するのは早計だろうが上向きの状態であることは確かである。（杉山）

後半は関東学生の〝同点〟許す

第2試合、対関東学生選抜Aは岡前義春、佐野和夫氏審判で開始

全日本 22（12−6 10−10）16 関東学生選抜A

○……関東Aはすべり出し良く塩崎のシュートでリードを奪ったその後全日本、関東学生ともシュートはうつが、GKの好守にはばまれ、得点できず。全日本が調子を出したのは10分を過ぎてからであった。全日本はセットから、ボールを廻し、ミドル・ポストで得点を重ねる。関東学生は速攻を主体とした攻撃で得点をあげるという試合運びで前半は12−6で終了。

○……後半も同様な経過で進んだが後半15分をすぎてから、関東学生は速攻及びセットから喜田を使い、喜田は早いモーションからくりだすシュートで得点をあげ、後半をタイにした。試合としては、常に全日本がリードするという形で、もりあがりにはとぼしかったがいたる所に好プレーが見られた

○…ディフェンス、キーパーにははっきりとした進歩のあとが見られるが、攻撃となると、眼にはみえないミス（たとえば選手同士の意志の疎通がないような）が時折見られた。勝負とは別に選手の技倆を探るという目的の選手起用があったにせよ、これは今後の強化の問題点になろう。また喜田、花輪のすばやいモーションからくりだすシュートがしばしばディフェンス陣をぬけゴールをわっていることも今後の課題となろう。この試合のシュート率は50％を僅かに割った。今後の努力を期待したい。（藤本）

【全日本】

		第1試合	第2試合
GK	下里	0	0
	本田	0	0
	福本	0	0
FP	近藤	1	4
	近森	0	1
	飯田	3	1
	東	5	4
	木野	1	2
	野田	3	1
	平岡	3	×
	藤中	2	×
	植木	1	×
	中井	1	×
	有永	2	×
	早川	5	×
	竹野	×	2
	江名	×	2
	小野口	×	1
	井上	×	0
	斎藤	×	3
	新実	×	1
	計	27	22
	7MT	（4）	（5）

×印は不出場を示す

【関東学生B】

			得
GK	田中	（明治）	0
	吉田	（早稲田）	0
FP	大矢	（芝工大）	0
	大江	（〃）	2
	荒井	（法政）	1
	笠原	（日体）	2
	加藤	（立教）	0
	藤井	（明治）	1
	花輪	（中央）	4
	植田	（〃）	1
	田上	（法政）	0
	沢武	（日大）	0
7MT（0）			11

【関東学生A】

			得
GK	大村	（日体）	0
	上野	（東教大）	0
FP	井上	（日体）	2
	谷藤	（〃）	0
	大川	（〃）	1
	塩崎	（〃）	3
	亀谷	（〃）	2
	氷海	（〃）	1
	高鍬	（芝工大）	2
	喜田	（中央）	3
	明石	（芝工大）	2
7MT（0）			16

全日本男子、強化合宿終わる
代表選考、大詰へ

全日本男子第3次候補による2回目の強化合宿（全日本男子通算第7次）は、11月12日から16日まで東大グランド、青少年センター体育館などを練習場にして行はれた。

竹野、江名、木野、本田ら21選手が全員顔を揃え、村田、勝、北川、高橋（英）強化委員の指導ではげしい練習がつづけられたが、第3次候補にしぼられてからは初めての体力測定なども試された。

強化委では、この合宿によって各選手の個人的なデーターを整え15日の関東学生選抜との試合（前掲）を最終代表選考の一つのチェックポイントにしたようである。

第3次候補の合宿はこれが最終となり、世界選手権代表14選手は12月21日全日本選抜選手権閉会式で発表される予定だ。なお、代表選手の第1回合宿は12月22日から26日まで東京・青少年総合センターで行はれ、第2回合宿は45年1月下旬に内定。

女子の選手強化にも着手

世界選手権基金運動は白紙に

全国理事会開く

日本協会全国理事会は10月26日午後6時から長崎市のレストラン〝よねづ〟に田村会長、西、渡辺副会長、荒川理事長をはじめ17理事と村田選手強化対策委員長が出席して開かれた。（欠席・副会長1、理事10）

会議は、今後の選手強化対策（世界選手権及びミュンヘンオリンピック対策）、協会財政、45年度事業、規程問題などが主要議題となり活発に論議された。

今後の選手強化対策については村田選手強化対策委員長から男子はともかくも来春の世界選手権をめざして予定どおりの強化を進めて行くという説明があり、さらに女子についても具体的な構想が明らかにされた。

それによると一九七一年に予定される第5回女子世界選手権に備えて来年早々に強化の第一歩をスタートさせるため、早ければ年内に第一次候補を選考したいというものである。

男子の世界選手権代表は予定どおり12月21日東京で発表されることに決まったが選手団の構成は団長1、監督1、コーチ1、選手14とすることに内定。場合によってはコーチをおかずマネジャー（1名）になる。

協会財政に関しては、本年度の協会財政の窮状が田村会長、渡辺副会長から説明され、赤字補てんに対しては常務理事会に一任することを申し合はせた。

また、諸経費の高とうなどで、今後の協会財政はかなり苦境が予想されるため、財源確保について新しい対策を打ち出さねばならぬとし、この問題の検討のため小委員会を編成することになった。

スタッフは嶋田常務理事を委員長とする世界選手権基金運動検討委員会（別掲）をそのままあてることになったが、結論的には通常経費の予想赤字約百五十万円を毎年度どのように埋めるかということになりそうで、加盟金、登録金用具検定料の値上げはさけられそうにない。

懸案の世界選手権基金運動については、嶋田常務理事（小委員会委員長）から、新しい提案（小委員会案）が示されたが、いぜん徴収方法に問題があることと、同基金は、募金を目的とした事業を活発化することによって当てるべきだという意見が支配的となり、この運動は完全に白紙に戻された。

45年度事業のうち国内事業は全日本選手権検討委員会の意向がまとまっていないことなどもあり未定分が多い。（別掲）

全国自衛隊選抜大会は当分自衛隊連盟の結成が行はれないという見とおしに立って、日本協会、全日本実連、自衛隊関係者が密接な連けいをとって準備することになり「主催・日本協会、主管・全日本実業団連盟」という異例の措置をこうじることになった。

なお、田中（滋）常務理事（全日本実連理事長）から「しばらくの間、自衛隊チームの登録は日本協会規程の外において欲しい」と要望があり、全国自衛隊選抜大会や地方（県）大会ではそれを認めることになった。

また、「中学校体育指導要領」への復活を前に、中学校指導者の講習会を開きたいという技術部の計画は、文部省に全面的なバックアップを受けるよう働きかけを行うことになった。国際事業については本誌2頁詳報のような決定をみた。45年度の主要事業予定は別表のとおりである。

日本協会諸規程の問題は、論議が「旅費規程」に集った感じでこの際統一した見解のもとに適用することを確認、昭和45年4月1日からの施行を目標に早急に変更案を常務理事会がねることになった。

「アマチュア規程」「職員就業規程」「登録規程」「徴罰規程」などについては基本線は問題ないが、改めて細部を検討することになり、常務理事会に一任された。

昭和45年度主要事業日程（除く国際関係）

▼内定の事業
- ▽中学校指導者中央講習会（4月・東京）
- ▽第2回全国自衛隊選抜大会（6月・東京）
- ▽第21回全日本高校選手権（8月・彦根市）
- ▽第22回全日本総合選手権（8月・和歌山県打田町）
- ▽第13回全日本教職員選手権（8月・広島県呉市）
- ▽第25回国体（10月10日～・岩手県盛岡市）

▼このほかの事業
- ▽全日本学生選手権（7頁参照）
- ▽全日本学生選抜東西対抗
- ▽全日本実業団選手権
- ▽全日本選抜選手権
- ▽全国審判員研修会
- ▽公認審判員研修会

▼検討中の事業
- ▽全日本チーム強化試合（国内サーキット）

〝財政確保〞に加盟金などの増額を検討

全国評議員会（10月27日 長崎）開く

国体時慣例の全国評議員会は10月27日長崎市のレストラン〝よねづ〞で開かれた。

評議員会出席資格の変更などもあって22人という近来にない出席数を得、当面する諸課題について協議。「外国チームの招待（45年度）」を決めたほか注目の「協会財政」については新しい方針を打ち出した。主な協議内容は次のとおり。

○…………○

▽出席者、評議員＝岡田（北海道）、太田（岩手）、由利（秋田）福島（宮城）、藤生（群馬）、若山（石川）、渡辺（新潟）、片瀬（静岡）、高井（岐阜）、横地（愛知）野原（大阪）、中村（和歌山）、小西（京都）、藤原（兵庫）、村山（岡山）、丸口（広島）、藤田（山口）、河本（愛媛）、小袋（福岡）池之上（宮崎）、増田（鹿児島）、西（全日本学連）。

日本協会＝田村会長、渡辺副会長荒川理事長、嶋田、田中滋各常務理事、森田、藤田各理事、村田選手強化対策委員長。

会議はまず田村会長から評議員代理資格の変更に対する郵便投票の結果（賛31、反1）が報告され「世界選手権、ミュンヘンオリンピックをめざして、すべて前向きの姿勢で進んでいきたい」という挨拶が述べられた。

ひきつづいて理事会、各専問委員会の報告が行はれ、協議事項に進んだ。

今回の会議でもっとも重要な案件とみられた「協会財政」については、6月にさかのぼって「世界選手権基金運動」案をも含めた論議が展開されたが、田村会長は前日の全国理事会の意向として「〝協会財政問題検討委員会〞を編成現状打開に手を打ちたい、世界選手権の基金運動についてもなお検討を進めるが、通常経費の収支に関しては加盟金、登録金、用具検定料の増額などを考える」旨発言があり検討委員会の編成を承認、来春の全国評議員会（東京）までに原案を作成することになった。

つづいて昭和45年度事業について討議され、本誌2頁詳報のように西ドイツチームの招待を決めた。

しかし、招待にかかる経費に充分なメドをつけてあたるべきだという発言が強く、田村会長、荒川理事長は「一試合あたり50万円の負担」という線を示し、一応の了解を得た。この問題に関して次回までに具体的なデーターを揃えることになった。

このほか「第7回世界選手権代表選手」の選考については選考委員会に一任を決定した。

―第16回全日本選抜選手権予想―

全立教―大崎電気の争い 男子

日体大、中央大にもチャンス

女子は大洋デパートの独走か

第16回全日本選抜ハンドボール選手権は12月19・20・21日の三日間、東京都体育館で開催され今回は第12回（昭和40年）に選抜選手権にかわって以来とられていた男女8チームによる準決勝リーグ・決勝リーグ方法が改められ、男女4チームづつによる決勝リーグ方式が採用される。これによって、初日から文字通りのトップチーム同士による激突が見られることになる。

出場チームは別掲の日程通り、男子は大崎電気、全立教大、日本体育大、中央大となり、女子は、大洋デパート、大崎電気、三菱鉛筆、田村紡に決定している。

話題は女子の大洋デパートが40年以来、4年ぶりに本大会に出場することである。同チームは例年年末は勤務の都合で参加できなかったが、今回は四冠王を掌中にするため出場することになった。毎年、大洋が欠けることによって一沫の淋しさを味っていた本大会も、今年は大きな盛り上りが得られよう。優勝の行方を占ってみよう。

（藤本 強）

男子

夏の全日本総合をはじめとする各種の大会を通してみて、優勝を争うのは、まず全立大と大崎電気ということになろう。全立大は全日本に江名、木野、野田、有永、小野口と5名のメンバーを送りこんでおり、また大崎電気も、福本、下里、竹野井上、近藤、近森、飯田、東、平岡と9名のメンバーが全日本に入っている。全立教はこれにOBのGK尾形と北村が入り、主力メンバーを組むものと考えられ、大崎はしの9人が主力メンバーとして登場しよう。全日本チームが全立大、大崎電気の両チームに分れ、試合をするといってもよい。

夏の総合では、大崎は前半有利に試合を進めながら、後半選手個々が個人プレーに走り、チームとしてのまとまりを欠いた点を全立大につけこまれ、逆転されている。大崎電気のメンバーは攻撃形であり、それぞれがすぐれたシュート力をもっている。一方の全立大はシュート力とともに試合のかけひきという点でもなみなみならぬ力を兼ねそなえている。更にこれにベテラン江名が加わるというのであるから、チームの総合力という点ではかなり上昇しよう。力の大崎、技の全立大という表現がとれる。

日体大、中央大の力も侮りがたい。若いだけにチームが軌道にのっている時の強さはむしろ前記二チームに勝っていよう。

日体大はGKに本田、FPに藤中、斎藤の全日本勢に主将井上、笠原、大川、氷海らが中心。二段速攻、セットからの斎藤のロングいわゆるエリア内のスカイプレーと走りまくるタイミングがあえばすばらしい攻撃力を見せる。守備もGK本田の堅守もあり、FPとのコンビもよくと固い。ただ難は若いだけに一度攻撃の歯車が狂うと、なかなか調子をとりもどせないキライがある。これをいかに巧く軌道にのせるかが大きな課題となろう。

それと、先日の全日本との対戦の際にも見られたことだが（関東学生Aは日体大が主力）、完全にセットになってしまうと、なかなか点がとれない。ここでロングヒッター斎藤をいかに巧く使うか、速攻――特に二段速攻――が出せるかどうかが一つの大きな鍵になろう。

中央大は佐々木、花輪らの若手の攻撃陣の進境がいちぢるしく、チーム力は一段と向上している。これら若手に喜田、植木、植田、長広らを配した攻撃力は他のチームに比して、いささかも遜色はない。セットではミドル、サイドと得点をあげるにはさして苦労はしないものと考えられる。パスワークも一流である。

問題は守備である。特にゆさぶりに弱く、GK望月も調子の良い時は良いが、一沫の不安がある。FPの守備陣も他チームに比べるとやや見劣りがする。ここが中央大の大きな課題である。

このように見てくると四チームとも非常に接近した力をもっているが、日体大、中央大の両学生チームには、若さはあるが、それ

だけに課題も多い。
これらの課題が克服された場合には、チームとして爆発力があるだけに全立大、大崎電気とも苦戦はまぬがれないであろう。
順当にいけば全立大ー大崎電気の優勝争いということになろうが、日体大、中央大とも紙一重の差だけに、四チームとも優勝のチャンスがあろう。

女子

優勝に一番近いのは、大洋デパートというのが衆目の一致するところである。今年になってからの実業団、全日本総合、国体と破竹の勢いで優勝街道をひた走っている。実業団の時は三菱、田村に2点差の試合をしているが、内容的に見れば、大洋が押しに押していた試合で全く危気がなかった。総合、国体では三チームと対戦しているがいずれも大差で快勝している。垂水、枝尾、渡辺、米を中心にした攻撃陣は健在だし、多彩な戦法をきりかえつつ使う豊富な試合経験も備えている。守備も好調、GKも小原安部と安泰である。よほどのことがない限り、大洋の優勝は動くまい。
大崎、田村は主力がこの春大量に引退し、若手のチームになっている。田村は夏の総合では、美和クに破れるという若さをさらけ出したが、国体では、見事に三菱を破り二位になっている。若林、小林、渡辺信らの得点力も向上している。GKは渡辺美が健在で、ゴールを堅守している。これは大きい。
大崎も若手が成長してはいるが大洋を追うところにまではいたっていない。木幡、三浦、山崎、志摩らの攻撃はまとまってはいるが昨年度のチームのような迫力にはまだ欠けるところがある。なお、いちど第一線から退いた早川をこの大会から再びエントリーしている。
三菱は今年こそと期待されていながら、国体では、田村、大崎に破れ、四位に甘んじた。田村、大崎が若手中心になったため、大洋に対抗するのは三菱が一番手と考えられていただけに、この国体の不成績は解釈に苦しむ。姫野、江川、蓮見、小田島らの攻撃陣はすばらしい攻撃を見せる時もあるがいつたんリズムが狂いだすとなかなか立ち直れない。この欠点を克服し、なんとか大洋に対抗してほしいものだ。
以上見たように大洋を除く三チームは不安定な要素が多く大洋の優勢は否めない。残る三チームがいかに大洋を苦境に陥しいれるかが焦点となろう。
二位争いは全く判らない。場合によっては、三者とも一勝二敗の同率で得失点差によって、二~四位が決る場合もありえよう。
田村、大崎、三菱の三チームの健斗を期待し、盛あがりのある大会になることを望みたい。
なお、テレビ中継は、20日午後4時30分からNHK教育(全国放送)。

全日本選抜選手権日程

▽第1日(12月19日)

15.10	男A	全立教ー中央大
16.30	女	田村紡ー三菱鉛筆
17.40	男B	大崎電気ー日体大
19.00	女	大崎電気ー大洋デパート

▽第2日(12月20日)

13.05	女	田村紡ー大崎電気
14.15	男	男Aの敗者ー男Bの敗者
15.35	女	三菱鉛筆ー大洋デパート
16.45	男C	男Aの勝者ー男Bの勝者

▽第3日(12月21日)

13.05	女	三菱鉛筆ー大崎電気
14.15	男	Cの敗者ー
15.35	女	田村紡ー大洋デパート
16.45	男	Cの勝者ー

入場券を発売中

日本協会では第16回全日本選抜選手権の入場券を事務局(東京都渋谷区神南町25、電467ー七〇九七)で前売りしている。
中学生とスポーツ少年団には無料招待券が出されている。
▽3日間通用券 400円▽一般学生券 200円▽高校生券 100円

32校に出場制限… 来年の全日本学生

今年度3回目の全日本学連総合役員会は11月25日東京・体協会議室で開かれた。
増加の一途をたどる全日本学生選手権の参加校制限について多くの意見が出された結果、来年の第13回大会から男子は32校におさえることを決めた。32校の学連別の割りあて数は、各学連の加盟校数を比率の基準にして算出・その年度最初の役員会で決定のうえ発表されることに内定。女子は当分のあいだ、制限を設けない。なお来年度の全日本学生選手権は11月中旬または下旬大阪で開かれる。東西対抗は名古屋(期日未定)に決定
このほか、かねてから要望が出されていた東海学連の西地区移籍が話し合われ了承、来年度から東海学連は西日本学生選手権などに出場できることになり東西対抗では男女とも西軍に属する。
懸案の規約改正については、今回も結論を得るまでにはいたらず12月22日東京で役員会を再招集、協議する。

東京女体大初優勝なる

男子 日体大は二連覇なる

全日本学生 男子二位中央大、三位に芝浦工大

男子第12回、女子第5回全日本学生選手権は11月25日に開会式（体協地下講堂）、26日から30日までの5日間駒沢体育館と屋内球技場に男子44（棄権1）、女子9校が参加して開かれた。

その結果、男子は日体大—中央大、女子は日体大、東京女体大、東京教大といずれも関東勢による優勝争いとなり、男子では日体大がもち前の速攻とGKをはじめとする堅守を生かし、中央大を降して二連覇をとげた。

女子はそれぞれ東京教育大を降し、一勝した東女体大と日体大が決勝を争ったが、力に勝る東女体大は後半、爆発的な得点力を見せ、念願の初優勝をとげた。これにより昭和36年以来続いていた日体大の対学生連勝記録は86でストップした。

関学、明治に敗れる

▽男子1回戦

愛知教大（東海）16（6－9、8－5、0－0、2－0）14 九州産大（九州）
富山大（北信越）24（9－6、15－12）18 追手門大（関西）
明星大（関東）26（14－3、12－4）7 北大（東北北海）
仙台大（東北・北海）10（3－4、7－3）7 防大（関東）
名城大（東海）30（16－4、14－3）7 明学大（関東）
慶大（関東）30（12－3、18－7）10 金沢工大（北信越）
東学大（関東）19（9－6、10－10）16 東北学院（東北・北海）
金沢美工（北信大）10（6－3、4－6）9 武蔵工大（関東）
順天堂大（関東）18（7－7、11－8）15 南山大（東海）
明大（関東）17（7－5、10－7）12 関学（関西）
京都産大（関西）17（6－6、11－3）9 本州大（北信越）
大阪体大（関西）16（4－6、12－4）10 岐阜大（東海）
東北大（東北・北海道）24（10－3、14－7）10 金沢大（北信越）

○……ほとんど予想通りの結果で関東学連の諸校が、力を見せた。屈指の好試合とされた明治×関学戦は一進一退ではあったが、常に主導権は明大が握っていた。エース藤井がいつになくさえず、それを田辺、鈴木らがカバーし、得点をあげていた。一方の関学は故障者もあり、また荒い明治のディフェンスにとまどってか真砂、井上らがミドルをとばして得点したものの主導権を奪うまでには至らなかった。秋季関西リーグの覇者も1回戦で姿を消した。

このほかでは緒戦の愛知教大—九州産大が、愛知教大のはげしい追いこみが効を奏し、延長となった。愛知教大の鮮やかな逆転勝ちとなった。進境を伝えられる仙台大、東北学院両校は関東2部の下位校に苦しみ、仙台大は辛くも後半押し切ったが、東北学院は遂に追いこめずに敗れた。

中京、明治を降す

甲南、早大に破れる

▽同2回戦

日体大（関東）28（14－4、14－8）12 愛知教大
国士舘大（関東）28（12－7、16－7）14 富山大
明星大 17（10－5、7－5）10 名大（東海）
法大（関東）20（8－5、12－5）10 京大（関西）
早大（関東）29（15－3、14－9）12 甲南大（関西）
立大（関東）24（11－3、13－3）6 京都産大
同大（関西）20（11－5、9－5）10 名城大
大経大（関西）18（7－7、8－8、2－1、1－1）17 慶大（関東）
中大（関東）31（13－4、18－5）9 東京学大
桃山学院（関西）22（10－8、12－5）13 仙台大
西南学院（九州）（棄権）山梨大（関東）
中京大（東海）13（7－3、6－5）8 明大
日大（関東）20（5－6、10－9、2－2、3－2）19 大阪体大
関西大（関西）37（19－1、18－2）3 金沢美大
東京教大 19（10－4、9－7）11 順天堂大
芝浦工大（関東）28（13－4、15－3）7 東北大

○……注目の早稲田×甲南は甲南に精彩がなく、早稲田の一方的快勝となった。

中京×明治は中京が滑り出しよく6—1とリード、明治はエース藤井が故障で中途から当場するということで元気がない。散発的に点をかえすのみで、完全に中京の攻撃を受けて力つきた。7人制一本化後、中京が関東1部校に勝つたのは初めて。

桃山学院×仙台大は前半、仙台の健斗で接戦となったが、後半は地力の差があらわれた。

立教、不運な抽せん負け

関西2強と中京大勝つ

▽3回戦

日体大 31（15－6、16－3）9 国士館
関西大 11（7－5、4－1）6 東京教大
中央大 26（16－3、10－8）11 大阪経大
芝浦工大 34（17－6、17－6）12 日大
法政大 23（11－7、12－3）10 明星大
＝以上、駒沢屋内球技場

レ

同志社大 15（4—5 9—8……1—1 1—1）15 立教大

抽せんで同志社大の勝ち

早　大 21（11—6 10—8）14 桃山学院

中京大 16（8—3 8—2）5 西南学院

＝以上、駒沢体育館

○……屋内球技場の4試合は関大×東京教大が接戦を演じた。立ちあがりは、互いに粘りのない相手を崩しあって得点を重ねたが、関大は10分5—4から安原、許の巧技で優位に立った。東教大は後半5分6—7と追いつたたが、そのごは若手中心の単調なプレーをくり返すばかりで加点できなかった。関大も決してよいデキとはいえないがチャンスを確実に活かして押し切った。

他の3試合は実力差がはっきりしすぎ試合の興味がうすかった。日大も秋季リーグほどの元気がなく前半で大勢が決まった。

○……体育館の4試合では立教が同大に抽せんで敗れるという大波乱がおこった。

両チームとも同じような型のセットプレーの応しゅうとなり立教が前半終了まぎわ小野口（全日本）の連続シュートで僅かに優位となった。

しかし、同志社は後半開始とともにスパート、進境著しい中井（全日本）と中野の好技で6分には8—6と逆に主導権を握った。

立教は18分10—11と追いこんだのだが、すぐ7MTをとられ苦戦がつづいた。同志社は20分をすぎて2点差をキープすべく消極的となったのが拙く1点（7MT）を加えただけで立教に粘られ、残り15秒で有永（全日本）にサイドから同点シュートを許してしまった

○……延長の先手も同大が前半1分中井でとり、後半小野口に返されたものの2分FTから中野が巧く決めて15—14。立教の反撃も空しいかと思われたのが4分40秒有永のシュートのはね返るところを倉前が押しこみ5—15。抽せんにすべてがかかった。

一瞬、とびあがる同大、ぼう然とする立教。

立教はパスミスが多かったうえに得意のセットプレーも切れ味がにぶく、粘りに粘ったもののこの日の出来では勝利は望めなかった。これで同大は関大と並んで関西から3年ぶりにベストエイトへ駒を進めた。

他の3試合は注目の早大×桃山中京×西南が、桃山、西南の不調から盛りあがらず、法政×明星も一、二部の差が現れた。

日体、後半に法政振り切る

▽同準々決勝

日体大 27（10—9 17—5）14 法政大

得	【法政】		【日体】	得
0	和田	GK	本田	0
0	川畑	GK		
0	佐川	FP	井上	3
2	大島	FP	谷藤	10
5	荒井	FP	笠原	1
2	田上	FP	藤中	3
2	田中	FP	塩崎	2
2	寺崎	FP	斎藤	7
0	大浜	FP	亀谷	1
0	菅	FP	大川	0
1	中村	FP	氷海	0
0	小石川	FP	松原	0
1	（1）	7MT（審・佐野、大塚）	（2）	27

○……日体はうまく先制機をつかんで7分3—1としたが、自信をもつ法政は10分荒井がミドルを決めたあと寺崎、大島の連続ゴールで逆転した。一進一退から日体は20分井上の鮮やかな空間プレーで7—5、28分には10—7と差をあけた。法政も粘り29分には速攻から寺崎、29分30秒にも荒井が判断のよい出足から独走、1点差に追いあげた。

○……関東学生秋季で引き分けている両校だけに後半の展開に興味が集まった。はたして法政は1分田中のゲットで10—10、波乱を期待させた。しかし日体は、セットから斎藤、藤中（ともに全日本）に相手ディフェンスを引きつけておいて谷藤、塩崎らへボールを集める戦法が奏効、特に谷藤の果敢なプレーで次第に点差をあけ20分20—11と開いて先が見えた。

○……法政は終盤疲れがのぞき、そこを日体の多彩な攻法にかきまわされた感じだが、主力の武井、西村を負傷で欠いていたのも響びいたようだ。（杉山）

関大、ベスト4へ進む

関西大 24（12—12 12—6）18 早大

得	【早大】		【関大】	得
0	山本	GK	入江	0
0	吉田	GK	神崎	0
0	尾島	FP	馬着	5
0	大竹	FP	西脇	4
2	斎藤	FP	許	5
1	嶋田	FP	横井	0
2	高橋	FP	伊奈	0
4	岩永	FP	竹内	0
0	長谷川	FP	小島	2
0	加藤	FP	塩尻	4
5	鈴木	FP	宮松	2
4	杉山	FP	安原	2
18	（1）	7MT（審・永山、住尾）	（2）	24

○……両チームともゆっくりとした試合運びでしかも攻撃範囲が狭く、ゆっくりしたペースに終始したが、互いに良く点をとりあい、前半12—12の同点。

後半に入っても、同じような試合のペースであったが、後半チャンスを生かす数の多かった関大が勝利を握った。学生らしいより活発な動きが欲しかった。（永山）

中大、同大の追撃かわす

中央大 15（7—4 8—8）12 同志社大

得	【同大】		【中大】	得
0	岩田	GK	望月	0
0	二橋	GK		
2	町田	FP	喜田	2
0	光田	FP	植木	1
2	中井	FP	長広	1
4	阪野	FP	佐々木	5
2	中野	FP	植田	4
0	増岡	FP	花輪	2
2	富田	FP	佐藤要	0
0	松井	FP	平元	0
0	水野	FP	中野	0
0	許斐	FP	武部	0
12	（1）	7MT（審・近藤、岡村）	（1）	15

○……同大は1分町田の巧プレーで先行したが、中大は6分3—1と逆にリード。

同大も11分、14分阪野の2得点ではなれなかったが、エース中井が、中大・佐々木のマークにあって得点機をつかめず追加点がとれない。中大はそのあとのチャンスを長広、花輪、佐々木が確実に決めて3点差、結果的には、この“貯金”がモノを云った。

○……後半も中大優勢のペースは変わらず18分には13—7と点差が開いたのだが、ここで中大は一息ついたのがいけない。気力にあふれた同大は19分町田のゲットを口火に連続4ゴール、11—13と迫り寒い場内に熱気をよんだ。

態勢をたてなおした中大は28分佐々木のゴールで14—11とどうやらメドをつけ、粘る同大の追撃をかわした。

同大のまとまりあるプレーが印象に残った。（杉山）

芝浦工大が順当勝ち

芝浦工大 16（9—3 7—4）7 中京大

得	【中京】		【芝浦】	得
0	戸田	GK	渡辺	0
0	後藤	GK		
2	鈴木	FP	高鍬	4
1	吉田	FP	平瀬	0
1	杉本	FP	金子	0
1	望月	FP	大矢	3
1	高良	FP	若崎	2
1	足立	FP	新実	3
0	笹野	FP	森	0
0	長縄	FP	明石	4
0	小島	FP	大江	0
0	大谷	FP	木全	0
7	（2）		（2）	16

○……試合はスタートから芝浦のペース、10分までに4—0、これで試合の大勢はほとんど決った。中京は散発的に得点をかえすだけその間にも芝浦は着々加点、大差をつけた。（西門）

終了5秒前、劇的な決勝点

中大—芝工大戦

▽準決勝

日体大 14（8—5 6—3）8 関西大

【関大】	得
GK 神崎	0
GK 入江	0
FP 馬着	0
FP 西脇	0
FP 許	0
FP 横井	0
FP 宮松	0
FP 塩尻	2
FP 竹内	6
FP 伊奈	0
FP 安原	0
FP 小島	0

（審・近藤・佐野）

【日体】	得
GK 本田	0
FP 井上	1
FP 谷藤	3
FP 大川	2
FP 藤中	3
FP 塩崎	1
FP 斎藤	4
FP 氷海	0
FP 亀谷	0

14（2） 7MT （0）8

○……関大は立ちあがり1分宮松のゲットで巧く滑り出したのだがそのあと20分まで無得点、日体の速いペースに乗せられてパスワークが乱れたうえ、無理なシュートが多く、逆に速攻をかけられて18分には8—1と大差がついた。

このままでは、まったく味気のない準決勝に終るところだったが調子にのりすぎた日体大は、前半20分から無駄なプレーが多くなり宮松を中心とした関大の反撃を許し、後半1分には8—6とつめられた。

○……ここでようやく日体大は態勢を立て直し4分藤中のゲットを口火に連続4ゴールをあげて12—6と再び優位に立ち粘る関大をGK本田（全日本）の堅守などで振り切った。関大は、前半日体大のスピードにつられてすっかり自分の試合運びを忘れたことと、ルーズボールのせりあいに負けて相手にしばしば得点のチャンスを与えていたのが敗因となった。

勝った日体大も序盤はロング、サイドさらには空間パスからシュートなど多彩な攻め口を見せていたものの、そのあとは攻守とも単調であまり賞められた試合ぶりではなかった。（杉山）

中央大 20（7—10 13—9）19 芝浦工大

【中大】	得
GK 望月	0
GK 井上	0
FP 喜田	5
FP 植木	1
FP 長広	3
FP 平元	0
FP 植田	5
FP 中野	0
FP 武部	0
FP 佐藤	0
FP 花輪	3
FP 佐々木	3

（審・岡村・大塚）

【芝浦】	得
GK 渡辺	0
FP 高鍬	0
FP 平瀬	0
FP 金子	1
FP 大矢	3
FP 若崎	0
FP 新実	6
FP 森	1
FP 明石	3
FP 大江	5
FP 木全	0

19（0） 7MT （1）20

スタートは快調に速攻の芝浦が4—0とリードを奪った。この間中大は中央からの攻撃がすべて芝工大のディフェンス陣に当り、攻撃のメドがつかない。中大は佐々木の好配球によって植田が決め、4—2となった。その後、新実を中心に芝工大が得点をあげ、中大も佐々木の好配球を植田などが決め、25分には7—7、その後、芝工大が3点連取して、10—7で前半終了。後半に入るとまず新実が決め、11—7と4点差。中央は植田3、花輪1と4点連取して、11—11。その後、常に芝浦がリードしながら、同点になること5度びこの間中央は喜田が当りはじめ、芝工大は大江を中心に加点していた。25分にはじめて中央が喜田でリードを奪うと、すぐ大失で返す。27分再度中央が佐々木でリード、芝浦も大江でタイ。この間芝浦が絶好のチャンスを二度つまらないミスで逸した。中央は最後粘りに粘った攻撃をし、終了5秒前、喜田が決勝点をきめ劇的な勝利を飾った。芝浦は後半になり、大事なところでミスがでたのに反し、中大は、佐々木、花輪の活躍に加えて、後半喜田が大事な所で確実に点を加えたのが勝因（藤本）

▽決勝

日体大 19（8—3 11—8）11 中央大

【中大】	得
GK 望月	0
GK 井上	0
FP 喜田	4
FP 植木	1
FP 長広	0
FP 平元	0
FP 植田	0
FP 中野	0
FP 武部	0
FP 佐藤	0
FP 花輪	5
FP 佐々木	1

（審・近藤・大塚）

【日体】	得
GK 本田	0
GK 大村	0
FP 井上	5
FP 谷藤	2
FP 大川	0
FP 笠原	0
FP 藤中	6
FP 塩崎	2
FP 斎藤	3
FP 亀谷	0
FP 氷海	1
FP 岩下	0

19（2） （0）11

日体は1分半、藤中のミドルシュートによって点をあげ、好調にスタート、中央もすぐに植本のミドルで1点返したが、日体は6分から16分までの間に、スローインをエリアに浮かし、これをとびみプッシュした井上の得点を皮切りに、7分斎藤（7MT）、8分、10分に塩崎、16分斎藤と連続5ゴールをあげ、完全な日体ペースにもちこんだ。18分に喜田、20分に花輪がそれぞれミドルで得点をあげた以外には、中大にはほとんどチャンスがない。花輪、喜田が中央からミドルシュート、長広がサイドからろうつが、いずれも、バックにコースをつぶされてからろうつので、本田の好守にあうか、ゴールを遠くはずれるシュートが多い。25分をすぎて、井上（速攻）谷藤（藤中のシュートのリバウンドを押しこむ）の加点があり、前半は8—3と意外な大量差。

後半中央の攻撃が期待されたが1分花輪、4分30秒花輪、6分喜田で9—6と3点差にしたのが精一ぱい。その後、7分井上（速攻）、10分藤中（7MT）、11分藤中（速攻）、13分斎藤（フリースローからのミドルシュート）と4連続ゴールで、13—6と大勢を決められた。その後も日体は速攻とミドルシュート、エリア内へのとびこみなどで加点、中央も喜田、花輪のミドルシュートでそれぞれ加点したが、結局、前半の差をつめるどころか逆に差を開かれてしまった。

日体大は速攻がかかっているときはいいが、完全なセットになると決め手がなく、中央はサイド、ポストからの動きを封じられると喜田、花輪のミドルしかない。両チームともセットオフエンスの研究をつみ、巾広い攻撃をしてほしいものである。日本のハンドボール界をになうと考えられている学生界のナンバーワンを争う決勝戦としては、内容的にものたりなさを感じたのは筆者だけであろうか（藤本）

▽三位決定戦

芝浦工大 21（7—11 14—8）19 関西大

【関大】	得
GK 入江	0
GK 神崎	0
FP 馬着	7
FP 西脇	4
FP 許	3
FP 竹内	0
FP 小島	0
FP 塩尻	1
FP 宮松	4
FP 安原	0
FP 横井	0
FP 伊奈	0

（審・佐野・岡村）

【芝浦】	得
GK 平野	0
FP 高鍬	7
FP 平瀬	2
FP 金子	1
FP 大矢	3
FP 若崎	0
FP 明石	0
FP 大江	2
FP 新実	5
FP 森	1

21 19

芝浦はGK渡辺が故障で、FPの平野をGKに廻さねばならず、これが苦戦の因となった。前半の4点差を後半11分30秒には、高鍬らの活躍で13—13の同点とした。この後もシーソーゲームを展開し4回同点になった後、26分には関大は馬着の連続ゲッドで19—17と2点のリード、これを芝浦は28分からの2分間で大失2点、金子1点高鍬1点とよく追あげ、3位を確保した。（藤本）

レ

三位に東京教育大

中京大は予選リーグで敗退

▽女子予選リーグA組

日体大（関東）13（5—3／8—1）4 日女体大（関東）

日女体大 10（6—1／4—2）3 中京女大（東海）

日体大 6（2—1／4—1）2 中京女大

〔順位〕①日体大2勝②日女体大1勝1敗③中京女大2敗

○……日体大が快調に他をよせつけず2勝をあげた。他の2校とは力の差がありすぎた。

日女体大が中京女大をかわしたのは賞してよいだろう。中京女大は相変らずGK北岡の堅守が光ったが、チーム全般にスピードがあまりにもない。

▽同B組

東京教大（関東）8（3—0／5—5）5 中京大（東海）

得	【東教】		【中京】	得
0	黒田	GK	西岡	0
			篠原	0
3	山口		野口	1
1	渡辺		砂浜	0
0	山口	FP	森	3
0	継	（審・近藤 斎藤）	石山	0
3	韮沢		安田	1
1	川島		大塚	0
0	岡田		窪田	0
0	橋本		稲井	0
			宮田	0
			田島	0
8	（1）	7MT	（1）	5

東京教大 3（2—1／1—1）2 大阪体大（関西）

中京大 10（5—1／5—2）3 大阪体大

〔順位〕①東京教大2勝②中京大1勝1敗③大阪体大2敗

○……なんといっても、東京教大の活躍は特筆に価しよう。前半、中京大はセット・オフェンスでたびたびシュートチャンスを迎えながら一瞬シュート・チャンスが遅いため、東教大のディフェンスにはばまれ、得点できず、焦っていた。一方、東教大は厚い中京のディフェンスを破れずに、いたずらにボールを廻すことが多かった。

しかし、時折訪れたサイドからのシュートチャンスをよくものにし3—0とリードし、前半終了。後半に入ると中京大の猛攻がはじまり速攻にセットに全員が良く走りディフェンスもプレス気味に良く当り、これが成功し、10分までに3—3と同点にし、なお、7MTを得、リードするチャンスを迎えたが、これを教大のGKにはばまれた。これを境にして後半に入って、中京の猛攻の前に縮んでいた東教大が気をとりなおし、両者ゆずらぬ攻防が続いたがシュートを確実に決めた東教大が2点をリードし、5—3、中京は追いかけるが、焦りも手伝い、攻撃が雑になるとともにディフェンスも乱れ、東教大に加点され、最後はマン・ツウ・マンのプレスに出たがこれも成功せずに、力を発揮することなく破れた。東教大の勝因は教少ないチャンスを確実にものにした山口、韮沢のシュート力と全員のパス・キャッチの正確さにあろう

○……東教大は続く大体大戦も苦しみながらも常に主導権を握り、決勝リーグ進出をはやばやと決めた。

▽同C組

東女体大（関東）24（10—3／14—1）4 東京学芸大（関東）

甲子園大（関西）23（11—3／12—2）5 東京学芸大

東女体大 13（5—2／8—2）4 甲子園大

〔順位〕①東女体大2勝②甲子園大1勝1敗③東京学芸大2敗

○……東京学芸大を同じようなスコアで降した東女体大と甲子園大の対戦に注目が集ったが、東女体大は相手のパスミスや積極的なカットで速攻を重ね、立ちあがりから優位を保ち、食い下ろうとする甲子園をつきはなした。東女体大の気力充実がめだった。

東女体大、圧倒的強さ

▽決勝リーグ

東京女体大 11（7—2／4—3）5 東京教大

スローペースで試合が始まり、21分までは、少ないチャンスを確実に決めた東教大のペース。12分をすぎてから、東教大のミスに乗じ高橋恭の好プレーをおりまぜ、5点を連取して東体大のペースとなった。（岡田）

得	【東教】		【東女】	得
0	黒田	GK	坂野	0
			松田	0
2	山口		熊谷	0
0	渡辺		中島	0
1	山本		高橋恭	3
0	継	FP	高橋清	1
2	韮沢		姫野	4
0	川島		堀江	0
0	岡田		阿部	0
0	橋本		永野	0
			伊部	0
			水上	3
5	（0）	7MT	（1）	11

日体大 9（6—2／3—5）7 東京教大

得	【日体】		【東教】	得
0	秋間	GK	黒田	0
0	大工原			
0	津熊		山口	0
1	沢谷		渡辺	1
4	中村		山本	0
0	藤田	FP	継	1
0	高嶋	（審・金沢 岡田）	韮沢	4
2	永田		川島	1
2	佐藤		岡田	0
0	木村		橋本	0
0	福田			
0	嶋田			
9	（1）	7MT	（0）	7

東教大は前半、日体大のディフェンスの壁が破れずに、山口、韮沢のシュートが決らず、非常に苦戦をした。一方日体は中村、永田佐藤らの攻撃で得点を重ね、6—2とリードした。

後半の日体はシュートが雑なため一時は同点につめよられながら中村の2連続ゴールでつきはなし辛勝した。（佐野）

東京女体大 9（4—3／5—1）4 日体大

○……立ちあがり両校は固くなり再三のチャンスをシュートミスやパスミスで逸したが、東女体大の激しい斗志は次第に日体大を圧倒しはじめ、高橋恭を中心に得点機をつかみ16分には3—1とリードした。

しかし、日体大も20分7MT（木村）で1点を返し、4—2からハーフタイム直前再び木村の7MTで1点差に追いつめた。

○……後半に入って東女体大はGKの好守と、高橋恭を中心とした鋭い攻撃で試合の主導権を握り、5分姫野、6分姫野、7分高橋清、8分中島と連続ゴールを決め10分高橋清のゲットで9—3。勝利を動かないものとした。

日体大は点差を開かれるにしたがって斗志もおとろえ後半は12分の7MT（木村）1点だけという貧攻に終った。日体大が36年以来つづけていた対学生86連勝という記録はこれで終止符がうたれた。（杉山）

得	【日体】		【東女】	得
0	秋間	GK	坂野	0
0	大工原		松田	0
0	津熊		熊谷	0
1	沢谷		中島	1
0	中村		高橋恭	3
0	藤田	FP	高橋清	2
0	高嶋	（審・斎藤 碇）	姫野	2
0	永田		堀江	0
0	佐藤		勇次	0
3	木村		加島	0
0	福田		水上	1
0	嶋田		阿部	0
4	（3）		（0）	9

〔順位〕①東女体大二勝、②日体大一勝一敗、③東京教育大二敗

関学、15シーズンぶりの優勝飾る

関西

各地の秋季学生リーグ戦

秋の学生リーグ戦は各地で熱戦を展開したが、関西は秋季も大混戦となり関学と関大が同率から得点率で僅かに優る関学が昭和37年以来春15シーズンぶりの優勝（通算25度目）を遂げた。

東海は中京大が快勝、東北北海道は仙台大、北信越は富山大、九州は西南学院がそれぞれ地力を示し優勝した。また中四国は新進松山商大が春に続く好調で連勝、注目された。

女子は東海が中京大、新発足の関西は甲子園大と予想どおりの結果に終わった。（関東は前号詳報）

北信越

富山大が8連勝飾る

◇10月18、19日 ◇金沢大体育館 ◇参加7校

常勝富山大は予選リーグで金沢大の健斗にあい後半辛くも逆転、決勝へ進んだ。一方の組では力をつけて来た金沢工大が福井大に逆転勝ちした余勢をかって決勝へ進出した。

決勝戦（1・2位決定戦）は、立ちあがりから富山大が試合の主導権を握り後半も着実に加点、8シーズン連続9度目の優勝を遂げた。

▽予選リーグA組
金沢大 15—14 本州大
富山大 23—17 本州大
富山大 11—7 金沢大
【順位】①富山大②金沢大③本州大

▽同B組
金沢美術工芸大 13—7 信州大
金沢工大 23—21 福井大
福井大 20—11 信州大
金沢工大 22—7 金沢美術工芸大
福井大 18—13 金沢美術工芸大
金沢工大 32—2 信州大
【順位】①金沢工大②福井大③金沢美術工芸大④信州大

▽5・6位決定戦
本州大 26（8—4 18—9）13 金沢美術工芸大

▽3・4位決定戦
福井大 20（8—10 12—6）16 金沢大

▽1・2位決定戦
富山大 19（9—5 10—6）11 金沢工大

東海（男子）

◇10月26日開幕、11月8日終了 ◇天神山球技場、名城大球技場ほか ◇参加1部6校 2部5校 3部6校

中京大を追う各校の進境で接戦が予想されたが中京大は名城大、愛知教大の激しい攻守をかわして、いぜんこの地区でゆるぎない実力を示した。これで5シーズン連続通算20度目の優勝、秋季の首位は10年連続である。

2部は春につづいて中部工大が全勝、3度目の優勝、3部は静岡大が初優勝した。

▽1部
中京 21（8—2 13—6）8 南山
名城 16（10—5 6—4）9 愛知教大
名古屋大 15（7—4 8—8）12 岐阜大
中京 13（4—3 9—4）7 名城
名古屋大 10（5—3 5—5）8 南山
岐阜大 21（10—11 11—6）17 愛知教大
名城 17（6—6 11—5）11 名古屋大
中京 14（4—4 10—5）9 愛知教大
岐阜大 26（12—6 14—5）11 南山
愛知教大 21（11—4 10—2）6 南山
名城 28（13—3 15—3）6 岐阜大
中京 19（7—3 12—5）8 名古屋大
愛知教大 20（12—2 8—7）9 名古屋大
中京 17（9—4 8—7）11 岐阜大
名城大 22（9—4 13—3）7 南山
【順位】①中京大5戦全勝②名城大4勝1敗③愛知教大・岐阜大・名古屋大2勝3敗⑥南山大5敗

▽2部
中部工大 14—11 三重大
滋賀大 17—13 名工大A
中部工大 35—11 名古屋学院
三重大 17—13 名工大A
名工大A 17—15 名古屋学院
滋賀大 23—14 三重大
名古屋学院 23—14 三重大
中部工大 17—13 滋賀大
中部工大 20—14 名工大A
名古屋学院 23—11 滋賀大
【順位】①中部工大4戦全勝②滋賀大・名古屋学院2勝2敗④名工大A1勝3敗⑤三重大1勝3敗

▽3部
大同工大 23—14 愛知工大
愛知大 19—4 名工大B
静岡大 22—15 県立三重大
愛知大 27—11 大同工大
県立三重大 20—6 名工大B
静岡大 32—4 愛知工大
静岡大 26—11 愛知大
大同工大 19—10 名工大B
県立三重大 25—15 愛知工大
静岡大 24—10 大同工大
名工大B 19—10 愛知工大
愛知大 18—13 県立三重大
静岡大 26—4 名工大B
愛知大 15—10 愛知工大
県立三重大 18—15 大同工大
【順位】①静岡大5勝②愛知大4勝1敗③県立三重大3勝2敗④大同工大2勝3敗⑤名工大B1勝4敗⑥愛知工大5敗

▽1・2部入れ替え戦
中央工大（2部）17（8—6 9—5）11 南山大（1部）

東海（女子）

◇11月1、3日 ◇天神山球技場、名城大球技場 ◇参加2校

全日本学生優勝を狙う中京大が2試合とも安定したチームプレーで中京女大を破った。いちぢは接戦をつづけていた両校だが、このところ水があいてしまったようだ。松阪女短大は2季連続不参加。なお中京大の優勝は7シーズン連続通算8回目。

▽1回戦
中京 13（6—3 7—5）8 中京女大

▽2回戦

中京 41（5―2 9―2）4 中京女大

関西（男子）

関大2位、3位に同大

◇10月18日開幕、11月8日終了 ◇大府大体育館 大阪市中西京極体育館 大阪市中央体育館ほか ◇参加1部6校、2部6校、3部6校、4部8校。

1部はまず本命とみられていた関大が最終日に同大に破れ、関大に敗れはしたが、他の四校を敗った関学がともに4勝1敗となり、得点率で僅かに勝った関学が15シーズンぶり25回目の優勝を飾った。三位には同大が入り、大経大、甲南大と続き、桃山学院大は0勝5敗で最下位におわった。

なお、2部は京大（2度目）、3部は前季4部優勝の追手門学院4部は京都産業大がそれぞれ優勝

▽1部

関西大 25（15―2 10―8）10 甲南
同志社 20（9―8 11―5）13 桃山学院
関学 17（8―6 9―7）13 大阪経大
甲南 20（7―9 13―5）14 桃山学院
大阪経大 11（5―6 6―3）9 同志社
関西大 22（12―8 10―11）19 関学

関学はすべり出しよく、前半10分までに6―2とリード、その後は関大ペースで12―8で前半終了し後半も点のとりあいで、緊迫した試合が続いたが、結局関学は1点差にまでしか迫ることができずに関大に破れた。

【関学】	得		得	【関大】
久岡	0	GK	0	入江
早島	0	GK	0	神崎
末瀬	2	FP	2	馬着
細井	6	FP	3	西脇
真砂	5	FP	5	許
木村	0	FP	4	松田
山本	3	FP	0	横井
富永	0	FP	0	竹内
大門	0	FP	0	小島
玉井	0	FP	0	塩尻
川上	3	FP	7	宮松
本徳	0	FP	1	安原
	（1）19	7MT	22（2）	

（審・門前、福井）

関西大 24（11―9 13―8）17 桃山学院
甲南 16（9―9 7―6）15 大阪経大
関学 15（9―5 6―8）13 同志社
同志社 25（12―5 13―3）8 甲南
関学 15（9―4 6―3）7 桃山学院
関西大 22（13―8 9―12）20 大阪経大
関学 26（13―8 13―6）14 甲南
大阪経大 18（10―7 8―7）14 桃山学院
同志社 21（9―10 12―9）19 関西大

【関大】	得		得	【同大】
入江	0	GK	0	二橋
神崎	0	GK	0	岩田
馬着	4	FP	1	町田
西脇	6	FP	0	光田
許	4	FP	1	大羽
松田	2	FP	9	中井
竹内	0	FP	4	阪野
小島	0	FP	2	中野
塩尻	0	FP	0	増岡
宮松	0	FP	3	富田
安原	0	FP	1	松井
横井	0	FP	0	水野
	（1）19	7MT	21（1）	

（審・前田、山崎）

同大の斗志はものすごく、関大の好調なスタートを中井らの攻撃で追い、前半は一点リードされ、後半に入る。後半開始後5分関大は得点なく、この間は同大は中井阪野らで8点をあげ、17―10とした。このあと関大も許・宮松らの得点でおったが、ついに追いきれなかった。斗志の差が大きく勝敗をわけた。

関西学生秋季

	学	関	同	経	甲	桃	勝	負	分
①関学	×	●	○	○	○	○	4	1	0
②関大	○	×	●	○	○	○	4	1	0
③同志社	●	○	×	●	○	○	3	2	0
④大経大	●	●	○	×	●	○	2	3	0
⑤甲南	●	●	●	○	×	○	2	3	0
⑥桃山学	●	●	●	●	●	×	0	5	0

	得	失	得点率
①関学	92	69	0.571
②関大	112	87	0.562
④大経大	77	78	0.497
⑤甲南	68	105	0.303

▽同2部

神大 13―12 京大
大体大 17―10 立命大
阪大 21―15 大外大
京大 21―10 立命大
大外大 16―10 神大
大体大 17―12 阪大
阪大 15―10 神大
立命大 21―18 大外大
京大 18―15 大体大
京大 23―11 阪大
神大 26―17 立命大
大体大 25―17 大外大
京大 22―9 大外大
立命大 13―13 阪大（分）
大体大 18―11 神大

【順位】①京大4勝1敗（得点率○・六二）、②大体大4勝1敗（得点率○・五七）、③阪大2勝2敗1分、④神大2勝3敗、⑤立命大1勝3敗1分、⑥大外大1勝4敗

▽同3部

大市大 25―21 大薬大
追手門大 22―9 大歯大
大府大 15―7 和歌山大
大市大 13―10 和歌山大
追手門大 10―9 大府大
大薬大 19―11 大歯大
追手門大 23―19 大市大
和歌山大 21―14 大薬大
大府大 15―9 大歯大
大府大 8―8 大薬大（分）
追手門大 18―11 和歌山大
大市大 28―16 大歯大
追手門大 16―14 大薬大
大府大 13―9 大市大
和歌山大 13―12 大歯大

【順位】①追手門大5勝、②大阪府立大3勝1敗1分、③大阪市立大2勝2敗1分、④大阪薬科大1勝2敗2分（得点率○・四九）、⑤和歌山大2勝3敗（得点率○・四六）⑥大阪歯科大5敗

▽同4部

大工大 25―21 大教大
大教大 22―13 京工大
京産大 19―11 近畿大
大工大 22―13 龍谷大
京教大 28―11 関外大
龍谷大 22―19 京工大
京産大 13―9 大教大
京教大 27―17 近畿大
大工大 31―17 関外大
京教大 26―16 大教大
大工大 21―15 近畿大
関外大 13―9 京工大
京産大 19―10 龍谷大
京教大 28―14 龍谷大
近畿大 20―12 京工大
京産大 14―6 関外大
近畿大 21―7 関外大
京産大 22―12 大工大
京産大 25―11 京教大
大工大 18―17 京工大
大教大 20―17 龍谷大
京工大 18―16 京教大
大教大 17―9 関外大
近畿大 17―17 龍谷大（分）
京産大 27―8 京工大
大教大 17―14 近畿大
大工大 23―21 京教大
関外大 14―12 龍谷大

【順位】①京都産業大7勝、②大阪工業大学6勝1敗、③京都教育大学4勝3敗（得点率○・五四）④大阪教育大学4勝3敗（得点率○・五一）⑤近畿大2勝4敗1分⑥関西外語大2勝5敗、⑦龍谷大1勝5敗1分、⑧京都工芸大1勝6敗

桃山、1部残留決める

▼各部入れ替え戦（11月日・大阪府立体育会館）

▽1・2部

桃山学院（1部）15（6－6　9－4）10 京大（2部）

▽2・3部

大阪外語大（2部）24（12－6　12－10）16 追手門学院（3部）

▽3・4部

京都産業大（4部）15（6－5　9－6）11 大阪歯科大（3部）

関西（女子）

◇10月21日開幕、11月3日終了　◇京都市体育館ほか　◇参加4校

昨秋の対抗戦（大体大―大薬大）、今夏の学連結成記念大会を経て待望の公式戦がスタートした。各校ともチーム力は未だしの感があったが、そのなかでは甲子園大が定評どおりの攻撃力を示し、最終日優勝をかけた大阪体大戦も巧く試合の主導権を奪って制勝、第1回リーグの勝者となった。

甲子園大 22（9－3　13－1）4 武庫川大
甲子園大 37（20－0　17－1）1 大阪薬大
大阪体大 23（10－1　13－0）1 武庫川大
大阪体大 30（19－0　11－2）2 大阪薬大
武庫川大 8（3－1　5－0）1 大阪薬大
甲子園大 8（5－3　3－1）4 大阪体大

【順位】①甲子園大3戦全勝②大阪体大2勝1敗③武庫川大1勝2敗④大阪薬科大3敗

【後評】戦前優位と考えられていた関大、同大が意外にも崩れ、全く予想もされなかった関学の優勝で舞台はとじられた。関学は大経大に勝ち、関大戦では敗れはしたが、同大戦は末瀬・真砂の活躍で勝ち、そのあとの桃大、甲南大戦を順調に勝った。関大は大経大に苦戦した以外は順調に進み、優勝まちがいなしとされていたが、最終の同大戦に同大の斗志の前に敗れ、得点率〇・〇九の差で関学に勝利をゆずった。関学はここ数年まったく不振であったが今大会は真砂・細井、主将末瀬の活躍で得点力を増していた。また他チームから全くノーマークであったのも一つの勝因であろう。3位には、なんとか面目を保った同大、4位には好不調のはげしかった大経大5位には、春一部に復帰した甲南が入った。関学とともに、甲南はこの大会の一つの眼であった。女子は今大会より正式に開催され、吉開、中本を有する甲子園大が最終戦大体大戦も危気なく勝ち記念すべき初優勝を飾った。上位2チームと下位2チーム間のレベル差がいちぢるしい。

松山商大、春に続く好調

中四国

◇11月8、9日　◇松山商大球技場　◇参加1部5校、2部6校

春季で初優勝した松山商大は自信にあふれた攻守で、広島大福山と前半接戦を演じた以外は危気なく勝ち星を重ねた。秋季での優勝は初めて。全般にシュートの確率が低く、走りこみも未だしの感じである。この点が是正されなければ中央との差は縮らないだろう。なお2部は広島大が初優勝。

▽1部

岡山大 8（13－5　5－9）14 広島商大
松山商大 17（11－4　6－8）12 山口大
広大福山 17（9－5　8－4）9 岡山大
松山商大 17（7－6　10－3）9 広大福山
山口大 17（4－4　13－4）8 広島商大
松山商大 31（15－4　16－4）8 広島商大
岡山大 7（3－4　4－3）7 山口大（引き分け）
広大福山 12（6－3　6－3）6 山口大
広大福山 16（9－3　9－7）10 広島商大
松山商大 23（13－3　10－9）12 岡山大

【順位】①松山商大4戦全勝②広島大福山3勝1敗③山口大1勝2敗1分④岡山大1勝2敗1分⑤広島商大4敗

▽2部予選リーグA組

広島工大 18－16 愛媛大
香川大 26－9 広島工大
香川大 16－7 愛媛大

▽同B組

広島大 18－11 山口大(工)
広島大 14（分）14 近畿大(工)
近畿大(工) 16（分）16 山口大(工)

▽同5位決定戦

山口大工学部 19（10－5　9－6）11 愛媛大

▽同3位決定戦

広島工大 20（13－8　7－7）15 近畿大工学部

▽同1位決定戦

広島大 17（9－10　8－4）14 香川大

仙台大が初の栄冠

東北北海道

◇10月25・26日　◇山形県営体育館

予選の上位チーム四校は東北大学、東北学院、宮城教大、仙台大の4チームとなり、この四校でトーナメントを行なった結果、仙台大が準決勝で宮城教大を、決勝で東北大をそれぞれ連破して初優勝をとげた。

▽準決勝

東北大 17（7－8　10－5）13 東北学院
仙台大 18（10－5　8－10）15 宮城教大

▽同決勝

仙台大 19（7－5　12－3）8 東北大

琉球大が決勝へ進出

九州（速報）

◇第19回九州大学体育大会ハンドボール競技（トーナメント）◇11月22、23日　◇熊本大球技場

西南学院―琉球大の決勝となり、西南が後半に点差を開いて2年ぶり5度目の優勝を遂げた。注目されたのは沖縄から初参加の琉球大が、前回優勝の鹿児島大などを降して決勝へ進出した試合ぶりである。（詳報次号）

▽準々決勝　長崎大24―11福岡教大、九州産業大26―15熊本大、琉球大15―13鹿児島大、西南学院21―10九州大

▽準決勝　琉球大25―15長崎大、西南学院14―13九州産業大

▽決勝

西南学院 20（9－9　11－8）17 琉球大

1月25日に壮行試合　全日本男子

日本協会では、第7回世界男子7人制選手権に出場する全日本代表チーム（12月21日に決定）の壮行試合を1月25日東京・駒沢体育館で行うことに決めた。対戦チームは未定。

本誌の次回発行は2月1日です。

下関中央工（高校男子）新居浜商（高校女子）が2冠

～第24回国体ハンドボール・長崎市～

大崎電気 9連勝（一般男子） 大洋デパート、安定の2連勝

得点争いは長崎、埼玉が首位

第24回国体ハンドボール競技は10月27日から31日までの5日間、長崎市営球技場に全国の予選を勝ち抜いた5部門73チームが参加して行われた。

連日の好天と多数のファンに囲まれて、郷土の名誉をかけた好試合がつづいたが、注目の高校男子はインター・ハイ優勝の下関中央工（山口）が接戦を巧みな攻守で勝ち抜いて初優勝（山口代表の優勝は6年ぶり2度目）、同女子も新居浜市商（愛媛）が夏以上の充実を示して初優勝、ともにダブル・クラウンの偉業を遂げた。

一般男子はナショナルプレイヤーを主力とした大崎電気（埼玉）が危気なく勝ち進み9連勝（東京代表として2回、埼玉代表として7回）を飾った。トップチームを集めた一般女子は大洋デパート（熊本）の堅城がこの大会もゆるがず2連勝4回目の栄冠に輝やいた。教員は予想通り大阪イーグルスー埼玉教員クの決勝となり大阪が制勝、4連勝6回目のタイトルを獲得した。

高校男子（10チーム）

▽1回戦（2試合）

大阪選抜 19（8—2、11—5）7 湯沢（秋田）

岐阜選抜 7（2—0、5—4）4 新居浜工（愛媛）

○……まとまりの単独か、精鋭を結集させた選抜か—2試合の結果は選抜に軍配があがった。

▽準々決勝

下関中央工（山口） 10（3—5、7—4）9 大阪選抜

下関の地力を改めて知らされた一戦。前半は完全に大阪のペース大谷、馬野、中村、横川らの活躍でリードした。ところがハーフタイムをはさんで展開は一変、下関は左右のゆさぶりから3点を連取して逆転、大阪も黒田の活躍で15分8—7と懸命に優位を保った。

自信にあふれる下関は18分7MT（古谷）でタイ、19分皆本のゲットで再びリード、大阪は21分馬野のシュートで9—9とはなれずすばらしい試合になった。

しかし下関はタイムアップ直前酒井が劇的な決勝点をマーク、辛勝した。（嶋田）

鶴崎工（大分） 11（9—5、2—5）10 全北海道

○……前半、鶴崎工は北海道のミスを速攻に結びつけ、セットでも鋭い走りで得点した。

後半、リードされた北海道は攻勢に転じ久保田の好シュートなどで15分9—10と迫った。このあと北海道は無駄なシュートが多く同点機を逸し、20分痛い1点を失い試合までも失ってしまった。（佐野）

長崎選抜 18（8—6、10—10）16 氷見（富山）

○……前半15分6—3とリードした長崎はそのペースで巧く試合を運んだのだが、氷見は後半8分からがぜん反撃、13分11—10と逆転した。その後は一進一退、最後5分に結着をかけたが、長崎は21分16—16から最後の力をふりしぼり22分吉田、23分牧野がダメ押しの7MTを決めた。（清水）

全群馬 13（8—2、3—9、……、1—0、1—0）11 岐阜選抜

○……インターハイ3位の桐生工と富岡混成の群馬はまとまりのあるプレーで岐阜を圧倒したのだが後半は岐阜ディフエンスの早いつぶしにあって追加点があげられず大苦戦となった。岐阜の反撃はすさまじく20分9—10、23分津谷（7MT）のあと24分脇若のゲットで11—10と逆転勝ちをおさめたかにみえた。ところが群馬は24分35秒に7MTを永井が冷静に決めて辛くも追いつき延長にもつれこんだ。延長後は再び群馬がペースを握り前半3分上原、後半3分川島がともにサイドからシュートを決め激戦にケリをつけた。よい試合だった。（岡前）

下関中央工危うく逆転
全群馬は後半一気に決める

▽準決勝

下関中央工 12（3—2、9—5）7 鶴崎工

【鶴崎】得						【下関】得
0	藤	斎	GK	徳	山	0
0	田	前		村	西	0
1	島	藤		谷	古	5
1	田	内		島	西	2
3	村	木		川	中	2
1	浦	三	FP	野	中	2
0	田	篠		井	酒	1
0	室	河	（審・	本	皆	0
1	幸			中	田	0
0	本	管	岡村	村	吉	0
0	中	野	若山）	葉	稲	0
7	（0）		7MT		（1）	12

○……決勝進出を意識しすぎてか両校とも動きと変化に乏しかった下関はゴール前につまりすぎ思うように得点できず後半10分3—6とリードされた。しかしこのあと古谷が連続3点をあげて追いつき15分いちどリードされたが17分の7MTで7—7としてからは本来の多彩な動きで1分おきに加点、鶴崎をつきはなした。鶴崎は後半はじめよいテンポとなりながら主導権を完全につかめなかったばかりに惜しい試合を失った。（野村）

全群馬 17（7—5、10—4）9 長崎選抜

○……群馬は永井邦、川島を中心としたセットプレーを巧く使い多彩な攻撃をし長崎の無理なプレーによる7MTの獲得も手伝って着々加点した。

長崎は立ちあがりの攻撃は鮮やかだったのだが、セットに入ってからのスピードが活かし切れず、また大事な時にミスがあり惜敗した。（河本）

得	【全群馬】			【長崎】		得
0	須貝	（富岡）	GK	園田	（口加）	0
0	吉田	（桐生工）	GK	森	（長崎工）	0
1	永井邦	（富岡）	PF	峰	（鹿町工）	1
0	松井	（〃）	PF	牧野	（佐世保北）	3
0	矢島	（〃）	PF	村田	（口加）	0
0	永井正	（〃）	PF	大崎	（〃）	0
4	中沢	（〃）	PF	若松	（佐世保北）	0
4	上原	（〃）	PF	深堀	（長崎工）	0
8	川島	（桐生工）	PF	上村	（佐世保北）	1
0	田村	（富岡）	PF	吉田	（〃）	3
0	滝上	（〃）	PF	松尾	（口加）	1
17		（2）	7MT		（1）	9

▽3位決定戦

鶴崎工 20（9—3 11—8）11 長崎選抜

○……試合は終始鶴崎のペース。長崎は昨日の敗戦で力つきた感じがあり、選抜チームのもろさが現れてしまったのはまずい。

鶴崎は藤島、木村、三浦らが多彩な攻撃力を示し、余祐のある試合ぶりだった。

全群馬の反撃実らず

▽決勝

下関中央工 13（6—3 2—4）7 全群馬

○……15分までは互いに1点づつを入れあっただけ。全群馬はそのあと2—1、3—2と先手をとったのだが下関は速攻、ロングを使い分け、しかも20分、24分50秒の

得	【下関】		【群馬】	得
0	山徳	GK	須貝	0
0	西村	GK	吉田	0
4	古谷	FP	永井邦	1
1	西島	FP	松井	1
2	中川	FP	矢島	0
0	中野	FP	永井正	1
3	酒井	FP	中沢	3
2	皆本	FP	上原	1
0	田中	FP	川島	0
1	吉村	FP	田村	0
0	稲葉	FP	滝上	0
13	（2）	7MT（審・岡井 日野）	（1）	7

7MTを活かし3点差をつけた。

後半30秒下関は酒井のゲットで7—3、全群馬がすぐに2点をあげただけにこの酒井の得点は大きかった。15分をすぎてから下関は3点連取で10—5と優位に立ち、宿願のダブルクラウンを決定づけた。全群馬は下関のディフェンスを最後まで攻めあぐんだ。（森）

高校女子（10チーム）

▽1回戦（2試合）

全北海道 8（5—1 3—1）2 広島選抜

小松市女（石川） 8（4—1 4—5）6 全愛知

○……全北海道×広島は広島のミスに乗じて全北海道が金子、小川らの攻撃力を発揮、快勝した。

有利を予想された全愛知が小松のまとまりに降ったのをみると、女子は〝選抜〟よりも〝単独〟上位を思わせる。

▽準々決勝

新居浜商（愛媛） 10（4—4 6—4）8 全北海道

○……事実上の優勝戦といってよかった。前半10分4—1とリードされた全北海道はポストプレーと7MTで16分4—4に追いついた。

後半もたえず先手は新居浜商がとったが北海道もはなされず接戦をつづけた。しかし新居浜市商は7—6から金村、曽我部の連続得点で3点差とし食い下る全北海道を振り切った。（岡田）

秋田選抜 14（5—7 9—6）13 熊本選抜

○……残り時間2分で13—11。熊本絶対の優勢だったが、秋田の驚くべき粘りはこの僅かな時間に鎌田、鈴木が連続ゲットして同点としたあと、残り25秒で当り屋・松岡が劇的な逆転シュートを決めて勝利をものにしてしまった。熊本にとってはあきらめ切れぬ敗戦だろうが終盤で体力の差が現れたといってよい。（狩野）

島原農（長崎） 7（2—3 3—2 … 2—1 0—1）7 全大阪

抽せん勝ち

○……たがいに固いディフェンスを崩すことができずに時間を経過させた。わずかに全大阪が先行、後半10分5—3とリードを奪ったが島原農は13分と17分（7MT）に原川が得点、延長に入った。

延長前半、島原は上田のゲットで初めて優位に立ったが、全大阪も後半1分浅田のゴールで同点となり、その後は互いに決め手がなく引き分け。抽せんで島原農へ幸運がころがりこんだ。（石切山）

小松市女 7（4—2 3—3）5 栃木選抜

○……小松はチームプレー、栃木は高岡の個人技を軸に攻めあったが、わずかに小松の動きが優った

新居浜市商が苦戦

▽準決勝

新居浜商 8（3—3 3—3 … 2—1 0—0）7 秋田選抜

得	【秋田選抜】			【新商】	得
0	石塚	（和洋女）	GK	岩崎	0
0	舟山	（〃）	GK	岡本	0
1	伊藤	（〃）	FP	磯部	0
1	鈴木	（〃）	FP	曽我部	2
0	秋元	（〃）	FP	大塚	0
0	鎌田	（〃）	FP	田中	3
4	松岡	（〃）	FP	金村	2
1	高瀬	（〃）	FP	出雲	0
0	石郷岡	（〃）	FP	森実	1
0	松本	（大曲）	FP	飯尾	0
0	大久保	（〃）	FP	林	0
7		（0）	7MT（審・野村 上田）	（0）	8

○……後半6分4—4から秋田は8分松岡、9分鈴木の得点で主導権を握った。守ってもGK石塚の好守で押し気味に試合を進めたのだが、新居浜市商は16分曽我部で1点差につめたあと、18分金村のシュートで辛くもタイとした。

延長に入ると新居浜市商が落着きをとりもどし、1分、2分田中が鮮やかにロングシュートを決めて主導権を握った。

秋田は2分松岡が1点を返したが及ばず惜敗した。ともに固さがみられたとはいうものの白熱した好試合といえよう。（若山）

島原農 6（1—2 5—2）4 小松市女

得	【小松】		【島原】	得
0	柿田	GK	井上	0
0	川端	GK	森山	0
2	古橋	FP	本多	1
0	高橋	FP	原川	2
0	北山	FP	森	1
1	農田	FP	上田	0
1	細川	FP	平	1
0	川田	FP	森本	1
0	越田	FP	森内	0
0	田中	FP	中村	0
0	土山	FP	島内	0
4	（0）	7MT（審・岡村 若山）	（1）	6

○……巧く調子の波にのっている小松は前半2—1から後半もすぐに1点をとり優位をつづけたが、島原農はポストプレーからじっくりと得点を返しはじめ5分3—3に追いついた。さらに9分本多のゲットで初めてリードを奪い13分原川（7MT）、16分森本が得点完全に主導権を握った。

小松市女は農田のロングシュートにたよりすぎたようで、そのため攻撃が単調、せっかくのリードを活かすことができなかった。（野村）

秋田、小松市女ともに3位

▽3位決定戦

秋田選抜 6（2—2 4—4）6 小松市女

引き分け

○……連戦のため両チームとも疲れが目立ち動きが鈍く、なかなか自分のペースをつかめなかった。
　しかし小松は2－4とリードされた後半4分から農田の活躍で逆に試合の主導権を握り、17分には6－4と2点差をつけた。
　ところが秋田は18分松岡でつめよったあとタイムアップ寸前7MTを得て鈴木が冷静にゴールを決め6－6とした。
　規定で引き分け両者3位となったが秋田の熊本戦（2回戦）につづく粘りは賞されるものがあった。（嶋田）

島原農、前半で力つく

▽決勝
新居浜商 12（7－1 5－3）4 島原農

得	【新商】		【島原】	得
0	岩崎	GK	井上	0
0	岡本	GK	森山	0
0	磯部	FP	本多	1
0	曽我部	FP	原川	1
1	大塚	FP	森	1
3	田中	FP	上田	1
6	金村	FP	平	0
1	出雲	FP	森本	0
0	飯尾	FP	森内	0
0	林	FP	中村	0
1	森実	FP	島内	0
12	（4）	7MT	（0）	4

○……島原農は出足よく1分本多のゲットで先行したが、その後は新居浜市商の厚い守りの壁を突破することができなかった。
　新居浜市商は前半10分までに金村の3点（7MT2）と田中の得点で主導権をとり、チャンスを確実に活かす巧妙なセットプレーで加点、前半でほとんど勝負を決めた。
　後半も同じような展開で進んだが、島原農も最後まで全力をふりしぼって健斗したのは大いに賞されよう。
　愛媛代表の優勝は初。インターハイとの二冠獲得は史上6校目である。（佐々木茂）

実業団が上位（1位～4位）を独占

一般男子（30チーム）

盛岡商友会（岩手）23（13－6 10－7）13 丸善石油（和歌山）

○……順当の結果といってよかった。

▽1回戦
大分ク（大分）24（10－3 14－8）11 マツダ・ク（青森）
神戸製鋼（兵庫）26（10－9 16－7）16 函館工OB（北海道）
全神奈川（神奈川）15（7－8 8－5）13 氷見ク（富山）
AOK栃木（栃木）30（16－4 14－6）10 SGク（福島）
熊本ク（熊本）20（10－10 10－7）17 日新製鋼呉（広島）
本田技研（三重）24（12－8 12－6）14 奈良ク（奈良）
住友化学（愛媛）23（15－6 8－8）14 県工ク（石川）
常盤工業（岐阜）24（14－9 10－9）18 甘楽農ク（群馬）
京都ク（京都）15（5－7 10－6）13 東北学院大OB（宮城）
高知ク（高知）17（9－4 8－5）9 北農ク（長野）
全佐世保（長崎）20（7－4 13－5）9 ウルフス（滋賀）
全愛知（愛知）26（8－12 18－9）21 小倉工OB（福岡）
徳山ク（山口）24（8－5 16－9）14 塩山ク（山梨）

　好試合が予想された全神奈川×氷見ク、全愛媛×小倉工OBは期待どおりの熱戦を演じた。熊本ク×日新製鋼呉も白熱した。このほか京都ク×東北学院大OB会が最後の5分間に勝負のかかる接戦となり、京都クが巧くチャンスをつかんで逃げこんだ。
　14試合のうち6カードが実業団×クラブの対戦、実業団がこのうち4試合をものにした。

熊本ク、AOK栃木と激戦

▽2回戦
大崎電気（埼玉）30（16－6 14－8）14 大分ク
全神奈川 34（15－9 19－7）16 神戸製鋼
熊本ク 18（9－8 9－7）15 栃木AOK
本田技研 19（12－7 7－10）17 住友化学菊本
常盤工業 17（6－6 11－5）11 京都ク
全佐世保 22（10－4 12－7）11 高知ク
全愛知 27（12－10 15－5）15 徳山ク
三景（東京）27（12－4 15－8）12 盛岡商友会

○……シードチーム大崎電気、三景はさすが強い。
　大崎は立ちあがりこそ1－4とリードされたがその後は平岡、東らを主力に多彩な展開で圧倒した。
　敗れはしたが大分クの精一杯の健斗は賞されよう。
　三景もスタートは1－3と先行を許したが、すぐに山原の活躍でペースをとりかえし後半15分には20－8とワンサイド。
○……両雄の快調に引きかえ住化が敗退する波乱があり、コートサイドをわかせた。
　住化は加藤、白石の得点力を活かして、ペースを握るかにみえたが本田技研も小刻みな動きから巧みに相手ディフェンスをゆさぶり小川の活躍と木下の7MTなどで一歩もひかず20分には10－7とリードを奪い、その後もチャンスを確実につかんでいった。
　エース加藤がマークされて苦しい住友化は後半長岑がよく動き反撃したのだが、追いあげかけたところで7MTをとられるなどミスが目立ち、本田の逃げ切りを許した。本田の策戦勝ちといえたが、住化はマークされた加藤に動きの工夫があればと惜しまれる。
○……常盤工業×京都クは京都がGK兼の好守で常盤の攻撃を防ぎ攻めては竹口の巧技でブのよい展開を見せたが及ばなかった。
　熊本ク×AOKはクラブ界を代表するにふさわしい激しいゲームだった。
　前半17分7－4とした熊本がそのまま試合を進めるかと思えたがAOKは本領の粘りを発揮、25分7－7。その後は後半15分まで一進一退となった。しかし脚力に優る熊本は13－13から坂田の健斗で25分17－12と再び優位に立ち、なお食い下ろうとするAOKの反撃をかわした。
○……全愛知は後半野田（全日本）餅原の好プレーで徳山クをつき放し、全神奈川は米沢、正本、大山の日進商会トリオが20点をたたきだす活躍を見せて快勝、全佐世保も田添－林田のコンビネーションプレーを中心に前半で勝負を決め地元の声援に応えた。

全愛知惜しくも敗る
熊本クも本田技研に

▽準々決勝
大崎電気 28（12－5 16－5）10 全神奈川

○……大崎は早い動きからロングサイド、速攻と多彩な攻め口で矢つぎばやに得点、前半15分には8－1と大差をつけ、その後も一方的に攻めまくった。
　全神奈川は、大崎の堅いディフェンスを攻めあぐみ後半になって

【全神奈川】	所属	得		【大崎】	得
大柴	（日進商会）	0	GK	下里	0
池田	（東洋食品）	0	GK	福本	0
米沢	（日進商会）	4	FP	井上	2
正本	（〃）	1	FP	西村	2
大山	（〃）	1	FP	近藤	4
北村	（日本発条）	1	FP	東	8
永島	（ ）	0	FP	平岡	5
出口	（日進商会）	1	FP	竹野	4
北橋	（〃）	1	FP	籏野	3
林	（日本鋼管）	0	FP	佐藤	0
中村	（セントラル自）	1	FP	谷口	0
	（0）	10	7MT	（3）	28

（審・狩野　藤原）

ようやく反撃を示したものの前半の失点が大きすぎ、15分8—20としたのが精いっぱいだった。（今村）

本田技研 18（9—4 / 9—10）14 熊本ク

【熊本】	得		【本田】	得
浜	0	GK	南	0
広瀬	0	GK	加藤勇	0
秦	5	FP	三浦	1
毛利	0	FP	星野	1
坂田	1	FP	小川	4
江口	3	FP	末岡	2
上妻	0	FP	大下	8
関	1	FP	岩本	2
三穂野	0	FP	栗山	0
井手下	0	FP	松岡	0
井	4	FP	加藤玉	0
（3）	14	7MT	（1）	18

（審・岡田　石切山）

○……本田は、大下の好配球から小川、岩本が得点、10分で4—0と好調なスタートを切った。熊本もチャンスはあったのだがシュートミスが目立ち、結果的には序盤での好不調が勝負へつながった。

後半、熊本は秦の好技と江口の7MTで追いあげ25分には14—16と迫ったのだが、本田は26分大下27分三浦がゲット、逃げ切った。本田の冷静な試合運びが目立ったが、熊本クの粘りは大いに賞されよう。（森）

常盤工業 14（5—5 / 9—7）12 全佐世保

【佐世】	得		【常盤】	得
市木	0	GK	渡辺	0
神山	0	GK	日比	0
本田	0	FP	中島	1
山高	3	FP	高橋	3
西	0	FP	山田	5
田添	4	FP	鳥村	2
林田	3	FP	丹羽	2
大川内	1	FP	安井	0
三坂	1	FP	桃井	0
中村	0	FP	吉金	1
最所	0	FP	大野	0
（3）	12	7MT	（2）	14

（審・今村　小田）

○……全佐世保は若さにあふれたチームプレーで強豪・常盤工業に挑み、前半は全くの互角。特に3—5から全佐世保が田添の連続ゴールで追いつき大いに盛りあがった。

後半、一進一退から全佐世保は大川内のゲットと二つの7MTで13分10—7と優位に立ったが、常盤はこのあたりからようやくオープンからのポスト、ロングなど多彩な攻撃が実りはじめ、20分11—10と逆転、一度同点のあと丹羽、高橋（7MT）山田がゴールを決めて全佐世保を退けた。

全佐世保の健斗が賞される一戦で特にGK市木の好守は目立ったが、斗志がすぎて〝体当り〟的な防禦が多かったのはまずい。（狩野）

三景 16（9—7 / 7—8）15 全愛知

【全愛知】	所属	得		【三景】	得
合田	（富士製鉄）	0	GK	尾形	0
柴田	（中京ク）	0	GK	西牧	0
安藤	（〃）	2	FP	竹村	1
千葉	（名城ク）	2	FP	江名	2
西尾	（中京ク）	3	FP	榊	4
牧	（〃）	2	FP	高梨	2
餅原	（日本碍子）	4	FP	内藤	6
野田	（大同製鋼）	2	FP	伊藤	0
小川	（桜丘会）	0	FP	山原	1
黒岩	（富士製鉄）	0	FP	上平	0
高橋	（〃）	0	FP	外間	0
	（3）	15	7MT	（2）	16

（審・木村　宍戸）

○……好試合。三景は前半20分で9—3とリード、そのまま進むかにみえたが、全愛知はこのあと連続7ゴールして、後半4分には10—9と逆転に成功した。試合の様相は一変、三景が内藤の活躍で15分13—11とすれば、全愛知も17分野田のシュートで同点、18分7MTを餅原が決め再び先行した。1点づつを入れあって26分15—14と全愛知がリードした時は、三景も危うく見えたのだが、残り3分間にセットプレーから内藤・榊が鮮やかにゴールを決めて、どたん場で〝勝利〟を奪いとった。

大崎、本田に順当勝ち

▽準決勝

大崎電気 23（10—3 / 13—6）9 本田技研

【本田】	得		【大崎】	得
南	0	GK	下里	0
加藤勇	0	GK	福本	0
大下	0	FP	井上	3
岩本	1	FP	西村	1
末岡	4	FP	近藤	8
小川	1	FP	東	4
星野	1	FP	平岡	4
三浦	0	FP	竹野	2
加藤玉	0	FP	佐藤	1
栗山	1	FP	籏野	0
松岡	1	FP	谷口	0
（0）	9	7MT	（1）	23

（審・岡村　若山）

○……大崎は前半パスワークに切れがなく、相手ディフェンスにつまりすぎていたが、本田の攻撃ももう一つスピードに欠け、思うように得点できなかった。

後半開始早々本田は末岡の2ゴールなどで3分6—10と追ったが大崎も多彩な攻撃を展開、終盤はワンサイドな試合になってしまった。（狩野）

三景、勝負強さ示す

三景 19（6—6 / 13—7）13 常盤工業

【常盤】	得		【三景】	得
渡辺	0	GK	尾形	0
日比	0	GK	西牧	0
中島	2	FP	竹村	0
高橋	3	FP	江名	3
安井	2	FP	外間	2
山田	4	FP	榊	5
桃井	0	FP	高梨	4
鳥村	0	FP	内藤	1
大野	0	FP	伊藤	0
丹羽	1	FP	山原	4
吉金	1	FP	上平	0
（3）	13	7MT	（3）	19

（審・野村　狩野）

○……前半は互いに固さがとれずクリーンプレーは少かった。しかし常盤が10分すぎからはたえず先手をとっていた。このペースは後半もつづき7分には10—7と常盤がリードしたが、三景はそのあと高梨の7MTを口火に一気に連続8ゴールをあげ、17分15—10と主導権を奪った。常盤も小刻みに得点を返し22分には2点差に盛りかえし予断を許さなかったのだが、三景は27分すぎから速攻で4ポイント、常盤を完全につき放した。

三景・江名（全日本）、常磐・山田のリードオフマンが互いにチームの持ち味を活かしあい好ゲームを展開したが、三景の勝負強さが特に印象に残った。（岡村）

本田、常盤を破り3位

▽3位決定戦

本田技研 14（6—11 / 8—1）12 常盤工業

○……東海にあって手の内を知りあった同士。前半は常盤が山田の巧技を中心に、コンビの悪い本田を圧倒したが、後半になると本田はGK南の堅守をはじめディフェンスの立ち直りで反撃の糸口をつかみ15分末岡のゲットで12—11と逆転そのあと3点を加えて優位に立ちそのまま逃げ切った。

常盤は、後半リードに気を許したのかまったく精彩がなく、24分高橋がやっと1点を入れるという不斟で自滅してしまった。（森）

三景前半の低調ひびく

▽決勝

大崎電気 16（11−5 5−4）9 三景

得	【大崎】		【三景】	得
0	福本	GK	尾形	0
0	下里	GK	西牧	0
1	井上	FP	竹村	0
1	西村	FP	江名	3
4	近藤	FP	外間	1
6	東	FP	榊	0
1	平岡	FP	高梨	1
2	竹野	FP	内藤	0
1	簱野	FP	伊藤	0
0	谷口	FP	山原	4
0	佐藤	FP	上平	0
16	（4）	7MT	（1）	9

（審・柳井 上田）

〇……関東選手権（9月・横浜）で大接戦を演じた三景へ「大崎の連勝ストップ」の期待がかけられたが、大崎の先制攻撃が成功、あっけない内容に終った。

大崎は5分東のゲットを先取点に巧くチャンスを活かして22分10−2とリード、三景の機先を制した。

三景はゴール前でもうひとつ決め手がなく大崎ディフェンスを崩せなかった。

後半、大崎の動きが鈍ったところを山原の得点で15分7−11と追いあげたが大崎も立ちなおり、それ以上に点差をつめさせなかった。

顔ぶれからみて大崎の優勝は順当といえるが、後半18分間ノーゴールの貧攻は研究の要があろう。（岡井）

2位に田村紡
3位・大崎電気 4位・三菱鉛筆

一般女子（12チーム）

▽1回戦

ブラザー工業（愛知）23（8−1 15−1）2 全北海道

全長崎 15（6−3 9−3）6 井原高OG（岡山）

大阪スターズ 10（5−1 5−3）4 全福井

全岩手 10（3−1 7−7）8 高知ク（高知）

〇……全岩手×高知クが好試合を演じた。ともに学生界のトッププレイヤーを主力に個人技をチームプレーに活かして対戦、1−1から全岩手は前半終了まぎわ7MT（熊谷）と藤原のゲットでリード後半に余裕を残した。

高知クはGK明神の好パスからたびたびチャンスをつかんだがフオローのタイミング悪く、後半20分5−10から3点を奪って追いこんだものの時間がなく惜敗した。

このほか大阪スターズが古川、田井、北口の巧技で全福井にほとんどつけいるスキを与えず制勝した試合ぶりが目立った。全長崎は7点を叩き出した石井の活躍を中心に快勝。

▽準々決勝

大洋デパート（熊本）23（12−1 11−6）7 ブラザー工業

〇……ブラザーの成長に注目が集ったが、大洋との差はまだ相当あるようだ。特に攻撃陣のスピードが物足りない。

大洋は前半15分までに9点を奪ってあっさり主導権を握った。（河本）

大崎電気（埼玉）28（16−1 12−1）2 全長崎

〇……地元の期待を集めた全長崎も、大崎の前にはなすすべがなく13分石井の7MTで1−4としたのが唯一の〝善戦〟。大崎はこのあと後半12分までに山本の7点をはじめ連続18ゴールして圧勝した。（今村）

三菱鉛筆（神奈川）12（4−1 8−3）4 全岩手

〇……三菱は阿保の好プレーなどで15分4−1としたが、その後はあまり好調なプレーが出なかった。

全岩手は、実業団の固い守りを破るだけのスピードがなく後半15分9−2と差がついて試合は決まった。（小田）

田村紡（三重）15（6−0 9−5）5 大阪スターズ

〇……田村紡の走り勝ちだった。特に前半は小林の好リードから鋭いタテパスで着々加点、守っても45度に対する巧みな「つめ」をはじめ完ぺきなプレーを見せた。

大阪は左腕・北口にたよりすぎた感じで平凡なシュートを射っては田村紡の逆速攻をうけた。（藤田）

田村、三菱鉛筆降す
大洋は大崎電気に楽勝

▽準決勝

大洋デパート 12（7−2 5−3）5 大崎電気

得	【大洋】		【大崎】	得
0	小原	GK	山田	0
0	安部	GK	小堀	0
5	垂水	FP	小林	0
0	米	FP	久保田	0
4	渡辺	FP	木幡	1
1	三宅	FP	三浦	1
0	田中	FP	栗林	0
0	枝尾	FP	山崎洋	3
1	島田	FP	寺尾	0
0	小林	FP	山崎照	0
1	蔵田	FP	山本	0
12	（1）	7MT	（2）	5

（審・佐々木兄弟）

〇……大洋は3分垂水のゲットにはじまり20分までに6点をあげた。これに対し大崎は単調なパスを繰り返すばかりで得点機をつかめなかった。

後半に入ってもこの展開はかわらず、大洋は巧みなセットプレーから多彩にシュートを決めて楽勝した。

田村紡 10（7−4 3−4）8 三菱鉛筆

得	【田村】		【三菱】	得
0	渡辺美	GK	吉田	0
0	久保	GK	本庄	0
1	三毛	FP	蓮見	0
2	若林	FP	鈴木	0
3	小林	FP	江川	0
2	渡辺信	FP	小田島	1
0	金田	FP	姫野	6
2	辻	FP	八重樫	1
0	久保田	FP	加藤	0
0	広森	FP	阿保	0
0	知念	FP	林	0
10	（1）	7MT	（5）	8

（審・岡井 日野）

〇……ゆっくりしたペースで試合は進み20分で4−4。田村はこのあとポストプレーから辻の連続得点と小林で3点差をつけた。

決定的なチャンスをつかめぬまま時間が経過し、17分田村紡は若林が後半初得点してリード、18分渡辺で9−7。三菱は21分姫野の7MTで1点差につめたが、田村紡は22分小林が相手のパスミスを引っかけて2点差をキープ、そのまま押し切った。（佐野）

大崎3位、三菱が4位

▽3位決定戦

大崎電気 5（4−2 1−2）3 三菱鉛筆

〇……互いに力を知りつくしている両者。前半大崎の動きが三菱を上廻り優位に立ったが、後半は三菱が復調、もつれた展開になった。

しかし三菱は同点とすべきだいじなところで7MTを落とし、さらに再三のシュートがバーにあたるなどあって大崎の逃げ切りを許した。

後半は10分で5−4、このままで終るとは思われなかったのだがともに追加点をあげられないで終ってしまった。（岡前）

大洋、立ちあがりから好調

▽決勝

大洋デパート 11（5−1 6−3）4 田村紡

【田村】	得		【大洋】	得
渡辺美	0	GK	小原	0
久保	0	GK	安部	0
三毛	0	FP	垂水	3
若林	1		米	0
小林	1		渡辺	4
渡辺信	0		三宅	0
金田	0		田中	0
辻	0		枝尾	2
久保田	1		島田	2
広森	1		小林	0
知念	0		蔵田	0

（審・佐々木兄弟）

11（1）7MT（1）4

○……体力・技術に秀れた大洋は枝尾の好リードから10分2—0と先行、田村紡も11分若林が1点を返したが、大洋は12分渡辺、20分枝尾、23分垂水が着実に得点、順当に点差を開いた。

後半の反撃が期待された田村紡だが、いきなり島田に2点を奪われ1—7。これで大勢は決まったといってよかった。

大洋は全日本総合（8月）についで二つ目の全国タイトル。2年つづけての三冠王、初の四冠王達成へ大きく前進した。（今村）

大阪イーグルスが4連勝

教員（11チーム）

▽1回戦

岐阜教員 29（16—8、13—12）20 香川教員

福井教員 18（8—4、10—10）14 福岡教員

岩手教員 20（9—8、11—10）18 山口県教員団

▽準々決勝

大阪イーグルス 12（7—5、5—4）9 岐阜教員

○……立ちあがり東の巧技などで巧くリードを奪った大阪がその後も岐阜の反撃を最少限に食い止めベテラン揃いらしい試合運びで押し切った。岐阜は後半25分9—10まで詰めよったが大阪・松尾の連続ゴールを許して惜しくも敗れた（岡村）

福井教員 33（17—4、16—4）8 沖縄教員

○……初出場で進境を伝えられる沖縄も、優勝候補・福井が相手では荷が重かった。

福井は早い動きから15分8—3とリード、その後もほとんどノーマークに近い状態からシュートをつぎつぎに決め大務した。沖縄が最後まで力一杯のプレーを示したのは好感がもてた。（岡井）

長崎教員 23（11—1、12—5）6 北海道教員団

○……地元の声援に囲れた長崎の快勝。攻めては大宮、黒川らの巧技、守っても加藤の堅守で北海道の動きを完全に封じこんだ。北海道は5分藤野が先取点を奪うよいスタートだったが、そのあと一挙に11点を連続され、後半も散発的に点をあげたに留った。（若山）

埼玉教員 27（10—7、17—9）16 岩手教員

○……岩手は前半12分3—3から増田、熊沢、高岡の得点で6—3としたが、埼玉は北井—結城の活躍で6点をもぎとりあっさり逆転。

後半は一方的に試合を進め17分には19—9と大差がついた。地力がスコアになったといえる。（日野）

▽準決勝

大阪イーグルス 27（13—6、14—7）13 福井教員

【福井】	得		【大阪】	得
越田	0	GK	島崎	0
		GK	広川	0
華立	1	FP	東	3
竹野	0		井上	3
森下	2		松尾	0
鶴野	1		青木	5
坂野	6		北岡	0
小谷内	3		奥浜	1
福田	0		木村	1
田嶋	0		福井	12
			樫塚	2

（審・抑井、富樫）

27（2）7MT（2）13

○……大阪は自分のペースで試合を運ぶのがうまい。この対戦でもそうだった。15分には7—2。速攻とセットで着実にポイントした若手を揃えた福井もかなり自信のある動きを見せたのだが、巧者に先手をとられてしまっては勝機がないといってよかった（佐々木茂）

埼玉教員 19（6—5、13—7）12 長崎教員

【長崎】	得		【埼玉】	得
加藤	0	GK	高橋	0
松永	0	GK	宮岡	0
鎌田	0	FP	金子	0
山川	0		高田	5
飯盛	2		高戸	2
藤井	1		北井	5
大宮	7		多勢	0
古川	1		結城	4
黒川	1		河住	1
白武	0		上久保	2
林	0		遠藤	0

（審・佐野、岡前）

19（2）7MT（2）12

○……スピードに富んだ両者の対戦は好試合となった。

押され気味の埼玉は前半終了まぎわ高田、河住で逆転、後半1分いちどはタイとしたが、その後は埼玉の先行を詳した。特に17分10—11と追いながら7MTを詳し10—12とされたのは痛かった。（日野）

長崎、福井破り3位に

▽3位決定戦

長崎教員 16（9—7、7—5）12 福井教員

○……4—4から長崎は前半13分大宮、黒川がそれぞれ2点をあげ8—4。福井は田島の負傷から苦しい展開を余儀なくされたがよく粘り後半20分12—13まで追いこくだ。しかし、長崎は25分大宮、27分黒川、29分飯盛がダメ押しの3ゲット、3位を決めた。（河本）

大阪、後半一気に勝負

▽決勝

大阪イーグルス 19（7—6、12—3）9 埼玉教員

【埼玉】	得		【大阪】	得
高橋	0	GK	広川	0
宮岡	0	GK	島崎	0
金子	0	FP	東	2
高田	1		福井	4
高戸	0		樫塚	7
北井	2		井上	1
多勢	0		松尾	0
結城	4		青木	5
河住	0		北岡	0
上久保	2		奥浜	0
遠藤	0		木村	0

（審・森、宍戸）

19（0）7MT（0）9

○……大阪イーグルスと埼玉教員が"優勝"をかけて対決するのはこれが7回目（国体4、全日本教職員3）。互いに慎重なスタートを切ったのも当然だった。

展開も一進一退となり6—6から大阪は前半28分福井の得点でリード。しかし埼玉も後半1分上久保、6分結城で8—7逆転した。ところがこのあと追加点をどうしてもあげることができず。大阪の反撃を許して10分9—8、20分12—8、25分16—8点差をはなされてしまった。後半なかばまでの緊張に比べ、終盤は味気ない試合となったが、チャンスとみるや一気にスパートした大阪の攻撃力は相変らずみごとだった。（日野）

長崎、埼玉首位分け合う

天皇杯（男女総合得点）争いは23ポイントをあげた長崎県と埼玉県が首位を分けあった。2県同率は第8回の大阪・北海道以来2度目のこと。

長崎は初、埼玉は2年ぶり2度目の優勝、競技別優勝トロフィーは来年3月まで長崎協会が、それ以後は埼玉協会が保持する。

皇后杯（女子総合得点）争いは熊本県が愛媛県をおさえて2年連続5度目の優勝を遂げた。

▼天皇杯得点①長崎・埼玉③大阪④熊本⑤三重⑥岐阜・山口・愛媛

▼皇后杯得点①熊本②愛媛③長崎④三重⑤埼玉⑥石川・秋田⑧神奈川・大阪

長崎国体回顧・中西敬一（大会副審判長）

▽一般男子　実業団チームとクラブチームとの差が例年の如くはっきりと試合にあらわれる結果となった。

第1シードの大崎電気はナショナルプレイヤーを揃え史上初の他競技にもあまり例を見られないであろう国体9連勝を遂げるべく第一戦より着実に勝ち進み優勝戦においては関東予選で苦戦をした三景を降しその偉業を達成した、優勝を逸したとは云え勤務事情や恵まれない練習会場等々多くの難問をこくふくし第2位を確保した三景、クラブチームとして実業団チームを最後までおびやかした佐世保クラブ、全愛知の健斗はたたえられるべきであろう。

▽一般女子　一般男子と同様実業団とクラブチームの差をまざまざと見せつけられた。

実業団のシード4チームが予想通り準決勝に駒を進めた。昨年来出場の大会にすべて優勝し自信をつけた大洋デパートは第1戦で主将枝尾の親指脱臼と云う不運はあったにせよ危げなく2連勝を飾る昨年より世界女子選手権大会の中止、チームの若返り等種々な事情でやや不振に悩む田村紡績は本大会を目標に努力を重ね三菱鉛筆を破り決勝へ進出したことは今後大いなる自信と力になるであろう。

▽教員　大阪イーグルスを筆頭に埼玉、昨年度開催県の福井、強化に努力を重ねた長崎、初参加の沖縄と点差こそ開いた試合はあったが好試合を展開した。

優勝戦は大阪対埼玉互角の試合を進めていたが後半、大阪は持前の試合巧者と要所要所に見せる速攻よりの得点を重ねて埼玉を振り切り、通算6度目の優勝を手中に納める、只大阪は大事な場面で4本の7Mスローを失敗し自ら苦戦を招いた事は一考を要することであろう。

準決勝地元長崎対埼玉の試合で長崎は勝たんがためにややラフプレーが見られ遺憾の声も聞かれたがよく健斗3位に入賞得点優勝に大いに貢献した。

▽高校男子　単独チーム5、選抜チーム5。全く互角の出場。組合せからどちらに単配があがるかと球趣を盛りあげた。

全日本高校優勝の下関中央工業のダブルクラウンなるかに焦点があてられたが下関は第1戦大阪選抜とのゲームにて前半2点リードを奪われ最後まで危うしと見られたが鍛えぬかれた高度な技術とチームワークとにより逆転、準決・決勝と進むにつれ落着きを取戻し大差こそつかなかったが2冠の夢を実現した。

群馬の親子の監督する2校のチームで編成した全群馬は全日本の雪辱を果さんと下関中央工業を最後まで苦しめ善戦したことは非常に好感の持てるものであった。

▽高校女子　男子同様、新居浜市商は全北海道・秋田選抜に苦戦はしいられたものの全日本高校優勝の自信とチームワークをもってダブルクラウンの栄光が輝いた。

地元島原農業は部創設日浅く幾多の苦難を乗り切り全大阪との第1回戦は抽せん勝ちを得、準決勝にて全日本高校2位の栃木女を中心にした全栃木を破り決勝に進出、し2位を確保し総合優勝に思はぬ好成績をあげたことは賞讃さるべきであろう。

大会期間中開始式前夜の心配された降雨を除き連日好夫の秋日和に恵まれ又本当によく整備された会場で選手諸が君思う存分活躍出来た事は何よりも嬉こばしい。

グランドと観客席との整理においてもやや応援するには距離にへだたりがあり物足りなさを感じさせないではなかった。観客・関係者一同の協力により整然と運営が出来たことも大会を成功裡に終了させた大きな要素であった。

協会設立日浅く経験者・役員の少い長崎で果して国体がスムースに開催・終了出来るであろうかと案じられていたが地元役員・関係者の並々ならぬ至努力により開始式と同時にその心配もうすれ安心して大会にのぞむことが出来た。地元協会長始め協会役員は勿論のこと蔭の力となり黙々とその責務に鋭意専念された記録・接待・救護等の人々、又選手諸氏に力一杯の活躍が出来るように連日連夜グランドコンデションに気を配り申し分なく整備された整備係の人々に心から敬意を表すものであります。

閉会式において総合優勝を分けた地元長崎と埼玉両県の代表者の手によりお互の健斗をたたえほこらしげに高々とささげられたトロフィー、その愛情あふれる行為に対し見る者本当に心温たまるものを感じ球界の歴史の一頁を飾るにふさわしいものであった。大会を成功裡に終了出来たことに対し地元県民・役員・日本協会田村会長始め各地より馳せ参じ連日審判・控・戦評を休む暇もなく担当された審判員諸氏に心より意を表するものであります。日本協会は勿論のこと長崎県協会の今後益々御発展あらんことを祈ります。

☆ ☆ ☆ ☆ ☆ ☆ ☆

海外トピックス

—— 藤本　強 ——

東ドイツが優勝

—バルチック・カップ—

今シーズン最初の国際トーナメントとして注目を集めた「バルティック・カップ・トーナメント」は9月9日から12日までスウェーデンに5ヶ国6チームが参加して開かれた。

大会はまず3ヶ国づつの予選リーグ（2組）を行ったあと各組の同位者によって順位決定戦が行われた。

来春の世界選手権の成績を占うためにもこの大会の結果は見のがせなかったが、着実に力を伸ばしている東ドイツが、予選リーグでソビエトを降した勢いをかって決勝でもポーランドを延長の末破り優勝した。

▽予選リーグA組

ポーランド 17（10－8、7－6）14 スウェーデンA

ポーランド 15（5－8、10－7）15 デンマーク

引き分け

デンマーク 15（7－7、8－5）12 スウェーデンA

▽同B組

東ドイツ 17（8－3、9－10）13 スウェーデンB

ソビエト 28（10－7、18－9）16 スウェーデンB

東ドイツ 16（6－5、10－9）14 ソビエト

▽5・6位決定戦

スウェーデンB 14（9－9、5－4）13 スウェーデンA

▽3・4位決定戦

ソビエト 22（11－6、11－11）17 デンマーク

▽決勝戦

東ドイツ 15（9－7、3－5、1－1、2－1）14 ポーランド

東ドイツの主力メンバーはジンマーマン、ガヌショフ、センゲルゲルノホフ、ペゾルト、ロスト、ラングホフ、ローセ

最近の国際試合から

世界選手権が近づくにつれ、ますます熱いもりあがりが各地から伝えられている。予選試合の合いまをぬい、ヨーロッパ各地で熱戦がくりひろげられている。

現在までに入手しているのは、次のような記録である。

ハンガリー 24（11－9、13－8）17 ノルウェー

ハンガリー 16（2－7、14－3）10 スウェーデン

ユーゴー 13－12 スウェーデン

ポーランド 17－14 スウェーデン

オーストリア 13（6－5、7－7）12 オランダ

オーストリア 18（11－11、7－6）17 オランダ

フランス 17（9－6、8－6）12 ブルガリア

フランス 20（11－6、9－5）11 ブルガリア

スイス 10－8 オーストリア

スイス 11－10 オーストリア

ルーマニアA優勝

—ティミソアラ杯—

世界選手権の前哨戦として、注目のティミソアラ・カップは11月22～24日に準決勝リーグ、26日に決勝、各位決定戦が行なわれ、ルーマニアAがスウェーデンを降し優勝をした。2位にはスウェーデン、3位はデンマークとなった。

▽決勝

ルーマニアA 19（9－5、10－10）15 スウェーデン

▽三位決定戦

ポーランド 18（11－7、7－7）14 デンマーク

▽五位決定戦

ユーゴーB 16（5－5、11－8）13 ハンガリーB

▽七位決定戦

ルーマニアB 19（8－10、11－6）16 フランス

▽準決勝リーグA組

ルーマニアA 23（12－8、11－8）16 フランス

デンマーク 25（10－11、14－12）23 ハンガリーB

デンマーク 23（13－13、10－8）21 フランス

ルーマニアA 18（7－3、11－6）9 ハンガリーB

ハンガリーB 18（10－8、8－6）14 フランス

ルーマニアA 16（8－6、8－7）13 デンマーク

①ルーマニア3勝（得57、失38）②デンマーク2勝1敗（得61、失60）、③ハンガリーB1勝2敗（得50、失57）、④フランス3敗（得51、失64）

▽準決勝リーグB組

ルーマニアB 10（6－5、4－4）9 ユーゴーB

スウェーデン 19（13－10、6－9）19 ポーランド

ユーゴーB 17（12－9、5－7）16 ポーランド

スウェーデン 17（7－6、10－5）11 ルーマニアB

ポーランド 20（10－11、10－8）19 ルーマニアB

スウェーデン 15（7－5、8－9）14 ユーゴーB

①スウェーデン2勝1分（得54、失44）、②ポーランド1勝1敗1分（得55、失55）、③ユーゴーB1勝2敗（得40、失41）④ルーマニア1勝2敗（得40、失46）

強豪順調に勝ち進む

――男子ヨーロッパカップ――

現在までに入手している男子ヨーロッパカップの成績は以下に記す通りであるが、強豪と目されるチームが順当に勝ち進んでいる。

予選の成績は不明であるが、注目のvfL・グンメルスバッハ（西ドイツ）とテトラン・プレソフ（チェコ）の試合はvfL・グンメルスバッハが10－9と記録不明で2勝した。

FC・バルセロナ（スペイン） ①18－20 ②29－15 HB・デュデリンゲン（ルクセンブルグ）

SC・デイナモ・ベルリン（東ドイツ） ①24－20 ②25－15 BSI・ベルゲン（ノルウェー）

vfL・グンメルスバッハ（西ドイツ） ①30－21 ②26－20 KS・スポニア・ダンチヒ（ポーランド）

クントセボ・モスコー（ソ連） ①30－20 ②31－11 HV・シタルデイ・アシタード（オランダ）

SC・ブダペスト（ハンガリー） ①21－17 ②28－17 ハフナル・フヤルダール（アイスランド）

RK・クルベンカ（ユーゴー） ①21－14 ②記録不明 UC・マルセーユ（フランス）

①は1回戦②は2回戦のスコア。ハポエル・フレト×ステアウア・ブカレスト、レブスキー・スパルタク・ソフィア×グラスホッパーズ・チューリッヒの記録は未着。

ユーゴー、カナダなど勝つ

世界選手権地域予選

世界選手権における日本の最初の相手はチェコ、ユーゴー、カナダに正式に決まった。――来春2月26日から3月8日までフランスで開かれる第7回世界男子7人制選手権の地域予選は11月15、16、28日世界9都市で各カードの1回戦が、つづいて11月22日から12月7日の間に2回戦がそれぞれ行われている。

日本の本大会予選リーグの相手を決めるユーゴー対スペイン、カナダ対アメリカは予想どおりユーゴー、カナダが連勝、本大会への出場権を獲得した。

日本の出場するB組にはこのほかチェコ（前回優勝）が参加する。

ザグメスターが10得点

ユーゴー対スペインの1回戦は11月15日、ユーゴーのパンセボで二千の観衆を集めて行われた。

試合は立ちあがりからユーゴーが優勢に展開、スペインのラフなディフェンスから8本の7MTを得て6点をあげるなどあって終盤は一方的な経過をたどった。

ユーゴーの攻撃陣ではエース・ザグメスターが10点を叩きだす活躍を示し、ホルバト、ポクラヤクが各5点をマークした。

ユーゴー 28（13－6、15－8）14 スペイン

×

ユーゴー対スペインの2回戦は11月29日スペインのヴィゴで行われユーゴが連勝した。

カナダ、接戦で連勝

アメリカ大陸代表を決めるカナダ対アメリカの1回戦は11月16日アメリカ・ニュージャージー州のリビングストンで行われ、接戦の末、カナダが勝った。

カナダ 21－17 アメリカ

×

カナダ対アメリカの2回戦は11月22日カナダのトロントで行われカナダがアメリカを降し出場権を得た。

強豪、順当に勝つ 1回戦

このほかのカードは、有利を予想された各国が順当に1回戦の勝利を掌中にし、2回戦の優勢も動かし難い。

各カード1回戦のスコア次のとおり。

東ドイツ 35（19－2、16－0）2 イスラエル

ハンガリー 29（15－6、14－5）11 ブルガリア

スイス 11（5－7、6－3）10 ルクセンブルグ

ソビエト 22（11－6、11－4）10 フインランド

ノルウェー 26（15－2、11－4）6 ベルギー

西ドイツ 記録未着 オランダ

アイスランド 28（12－2、16－8）10 オーストリア

モロッコ姿を見せず

ポルトガルも棄権

この地域予選で動向を注目されていたモロッコ（注・アフリカ大陸代表を認めぬIHFの予選組み合せに抗議＝本誌前号8頁参照）は、ついに予選には姿をみせずポーランドの不戦勝となった。

また、スウェーデンと予選を行う予定のポルトガルも棄権した。

決勝戦はタータンコート

世界選手権を主管するフランス協会は11月14日パリで、来春の大会の決勝戦（3月8日）はタータン（全天候）コートで行なうと発表した。同コートのスタンドは七千五百人の観衆を収容できるという。

なお、予選リーグC組フランス対ルーマニア（2月26日）戦もこのコートで行われることになっている。

全日本男子遠征報告(4)

ルーマニアハンドボール界

福本弘
（GK・大崎電気工業）

一九六〇年（昭35）に11人制ナショナルが来日して以来、日本とルーマニアのハンドボール界は友好関係はいっそう深いものになりそうしたことから、今回の合宿に対してもルーマニア関係者のわれわれに対する心づかいは実に暖かくこまかいものがあった。

一九六〇年を境に、世界のハンドボール界は11人制から7人制に変わり、ルーマニアもその波にのって訪日以後11人制から7人制主体に切り変えた。しかしプレイヤーは11人制時代の主力がそのまま7人制でも攻守の軸となり、一九六一年にドルトムント（西ドイツ）で行われた第4回世界選手権では、前年日本に来たメンバーに一人二人の新しい顔を加えた程度であった。

しかし、選手の努力とベンチワークが一丸となってみごとにルーマニアはその選手権を握ったのだ。

この大会ではルーマニアと日本だけが11人制時代のメンバーを引き継いで臨んだのである。

北欧諸国はそれ以前から7人制主体となっており、そのハンデを乗りこえたルーマニアの優勝はみごとというほかはない。

この時から世界ハンドボール界におけるルーマニアの位置と名は最上位から動かし難いものとなり以後今日まで、つねに一方の雄としてクローズアップされて来ている。

当時のルーマニアナショナルチームのコーチの話によると、6ケ月間の長期合宿を行い、練習過多で夜寝つかれず、真夜中にディフェンスの練習を行ったこともあったという。その結果が〝優勝〟となり、この労苦が実ったわけなのだが、ルーマニアはこの時から「世界を制覇するにはディフェンスの強化にある」という一つの基本理念を持つに至ったのである。

この教訓は第5回大会に備えていっそうのディフェンス強化練習になってあらわれ、その目標どおり王座を確保したわけだ。しかし前回の第6回大会は新旧の交代期からくる選手層のうすさに悩みチェコスロバキアに首位の座を明け渡し3位に甘んじたのだが、再び来春は、世界の最上位へ君臨すべく激しい斗志を燃やしている。

そうした状態のところへ、我々日本チームが強化合宿に乗りこんだわけなのだが、ルーマニアハンドボール界に身近かに接してみて考えていた以上にその組織などが確立されていることを知った。

世界ハンドボール界の一流国の素顔ともいうべきその実態を以下につづることにしよう。

×

ルーマニアのハンドボールチームはヨーロッパ諸国と同じクラブである。

クラブの流れは大きく五つに分かれている。

即ち軍隊、警察、鉄道、労働者官庁だ。

それぞれ各地に大きなコートを持っており、他の競技も同じシステムを採っている。

ルーマニア人なら誰でもクラブ加に入できるかというとそういう訳ではなく、試験のようなものが希望者には課せられる。

我々が主に練習を行っていたボインツア（労働者組織）グランドには毎日のようにこの組織のクラブに加入しようとする人が集って来ていた。

クラブに加入できた者は用具一式が練習またはゲームの時に貸し出される仕組みになっている。

ハンドボールコートは各クラブ2～3面はあり、よく整備されていた。感心されるのは立地条件のよいところにそうした施設があることだ。つとめ帰り、学校帰りに気軽に行ける場所にあるわけだ。

ルーマニアの場合、4月から10日なかばまではすべて屋外（7人制）で行われる。ゲームは土、日曜に行われ、この期間は雨でも屋外で消化されるという。

我々も土、日曜には定期試合を必ず観戦に出かけたが、一般男女はもとよりジュニアのゲームの内容もかなり濃いものがあり、ルーマニアハンドボール界の底辺の広さを思い知らされた。

各地方の予選を勝ち抜いたチームを首都ブカレストに集めて行う大会には、各クラブとも飛行機を利用して参加するそうで、それはまたクラブのスケールの大きさを物語ることにもなるだろう。

一般、ジュニアを問はず本部協会の人たちは全てのゲームを真けんになって見つめている。

特に強化委員会のメンバーは小さな試合の中からも〝次代のナショナルプレイヤーを発掘しよう〟というまなざしで熱心にプレーを追っている。

そのため選手たちもまったく気を抜くことなく、全力でゲームを行う。そのためすべてのゲームが迫力に富み見応えがある。

強化の目が注れているのは選手ばかりではない。

コーチ、トレーナたちもつねに強化されているのだ。

例えばスナゴナというトレーナーセンターで行われた講習会では10日間、それも一日八時間近い日程の研修が組まれている。講座の内容はディフェンス、オフェンスゴールキーパー、策戦面などに分けられ、それぞれ専任の講師によって進められる。

その講議の内容の多さ、深さには驚ろくばかりである。講座の終了と同時に試験が行われ、賞号を与えられて各クラブに戻る。

この場で学んだ方法や戦法を自分たちのクラブに帰って教えるわけだが、これはルーマニアハンドボール界の理念を一貫させるという点で極めて注目に価するシステムといってよい。

つまり、選手は例えトレーナーがちがっても、教わる内容、指導されるテクニックは同じであり、

それは各チームから選抜されてチームを編成した場合、混乱が生じることが最小限に食い止められるのだ。
　短期間でコンビネーションが整えられるわけでもあり、ルーマニアハンドボール界の強さの一端をうかがえよう。
　レフェリーに対する訓れんも常に行われているという。
　選手、トレーナー（コーチ）、レフェリー、この3者に対してのたゆまぬ研さんが、ルーマニアハンドボール全般のレベルアップに最大無二の役割を果していることは多言を要すまい。
　ところで、そのルーマニアハンドボール界のつねに最上位を争っているのは男子ではディナモ・ブカレストとステァウァ・ブカレストである。
　ともに多くのナショナルプレイヤーを持っており練習時間も豊富である。したがってこの両者と他のチームとの差はかなりあるようで、ナショナルチャンピオンを決める全国リーグの優勝争いは、ここ数年つねにディナモ－ステァウァということである。
　女子は、各チームの力が接近している。チームとしてはあまり強いという感じはうけないのだが、各チームの要となっているナショナル選手を見ていると、その個人のプレーは実にすばらしいし、豪快である。
　おそらくナショナルチームのスケールは大きく、強いものであろうと想像される。なお、すでに御承知と思うが、ルーマニアの女子は11人制時代の2回の世界選手権で2度とも優勝し、7人制でも第2回大会に優勝している。
　以上のようなルーマニアハンドボール界の組織と実態を見ると、いかにルーマニアが総力をあげての支援のもとに世界ハンドボールの最高の地位を確保しようと努力していることが判り、とりわけ協会幹部全トレーナー（コーチ）が一致協力して最高目標に向かってたくましい歩みをつづけていることには敬服のほかはない。
　長期的な構想、一貫した理念、合理的な計画……。
　その点、日本は目先のことにあまりにもこだわりすぎてはいないか。
　大きい目で将来を見さだめない限りヨーロッパ諸国のレベルに追いつくことは難しい。
　ルーマニアハンドボール界の自信にあふれた姿勢を示すものの一つとして、こういうことがある。
　今、ルーマニアチームが多用するプレーに「パラバン」というのがある。これはカーテンとか壁とかいう云う意味の言葉で、いわゆる各国でいうブロックプレーの一種なのだが、ルーマニアはあくまでルーマニア語のパラバンという言語でこのプレーを表現することを強調している。ルーマニアハンドボール界の"力"を感じとれるのではないか。
　さて、ルーマニアがディフェンスの強化に重点をおいていることは前に述べた。この傾向は各国にもうかがわれ練習の主眼は六分四分または七分三分でディフェンスにおかれている。
　ヨーロッパ各国（ナショナルチーム）の当りのはげしいのにはまったく驚ろかされる。
　あるゲームで両チーム合わせて14回の退場が記録されるのをみてびっくりしたが、時には20回以上もこうしたケースがあると聞かされた。ナショナルチーム同士の激突はまさに"剛対剛"の対決である。しかし、けっしてつかんだりかかえこんだり、握ったりという反則はない。"当り"ばかりである。それが筆舌につくせぬ激しさのだ。
　ルーマニアは、このことを頭において強化に進んでいる。
　われわれはルーマニア、ハンガリー、ユーゴー、西ドイツと巡訪してそれぞれの国のシステムやプレーを再認識して来たのだが、結論的にはルーマニアの名コーチイオン・クンスト氏がわれわれに与えてくれた『その国の戦法や策戦はその国独自のものを造ることが最善である』ということになるだろう。
　日本のハンドボール界が大きな目標を成就させるには、やはり日本独自のシステムなりプレーなりを確立することはあるのではないだろうか。
　同時に、それは日本ハンドボール界が急務とすべき大課題であると思う。

ステアウア・ブカレスト
―有名クラブの一例―

村田　弘
（全日本男子監督）

ヨーロッパクラブの代表的な一例としてルーマニアのステァウァブカレストの場合を紹介しておきたい。
　このクラブは陸軍のスポーツ組織でルーマニアのというよりヨーロッパハンドボール界の名門チームだ。一昨年の第9回ヨーロッパ杯優勝チームであることを御承知の方も多いだろう。
　選手は兵役で軍隊に入ったものの中から優秀な者が選抜されて現在は15人のスタッフである。面白いのは、兵役が終ったあとでも実力を買われて残る者がいることで15人のうち1人がそのケースだという。ジュニアチームを傘下にもつが、これは陸軍関係でなくても入れる。ジュニアから一軍へ上がってくる者はいないが、まれにはいるようで現主将オツェリアはジュニア出身だ。あくまで入隊（兵役）が優先されるから地方から有望選手をスカウトしてくるようなことはないそうだ。陸軍自体、午前中1時間"スポーツの時間"があり全員スポーツを行う。選手はそれ以外に1時間の練習が認められる。毎日2時間の練習をシーズン中や試合前は一週4日間行う。練習以外は軍務に服するが、スポーツ選手は優遇され上司も大目にみてくれる。
　体力練習はほとんどボールを使って行われ、特にこれといった基礎体力、走力トレーニングはない
　このチームの場合は、つねにナショナルに多くの選手が引っぱり出されるのでそんな暇はないともいえる。したがって平常練習もコンビネーション練習が多い。
　年間ゲーム数はA（1部）リーグが10チーム3回総当りで計27試合その他国際試合も数多い。
　同じブカレストに本拠をおくディナモ（警察）とは宿敵の間柄で両者の対決は壮絶の一語につきる
　こうしたクラブの角逐が、どこの国でも見られ、それが各国ナショナルの充実につながっている。

第68号から4回にわたって連載したナショナルチームによる「ヨーロッパ遠征報告」は今回で完結いたします。

ハンドボールの歩み（第17回）

ツルド・モスコー（ソ）連初優勝

初参加のデンマークも2位へ

ヨーロッパカップ編 ⑦

当初の予定では、このヨーロッパカップ編は男子とか女子とかいう形でとりあげず、年を追って叙述し、その間の事情をおりまぜることによって、各国のトップチームの消長を明確にしていこうという考えでとりかかったのであるがついつい男子に深入りし、気がついてみたら、男子は1965年になっていた。ここのところ、ヨーロッパカップ編④、⑤、⑥と男子を続けたためこのようなことになってしまった。女子は今年6月号にヨーロッパカップ編③として掲載しただけにとどまっている。ここで二・三回女子を連続して掲載し、その後、男女合せた形にしていきたいと考えている。

この間に女子の世界選手権は1962年に第2回大会がルーマニアで、1965年に西ドイツで第3回大会が開かれており、前者では1位ルーマニア、2位デンマーク、3位チェコ、後者では1位ハンガリー、2位ユーゴースラビア3位西ドイツの結果になっている

男子同様、東欧圏が力をはっきりとみせつけている。ヨーロッパカップでも、第1回がルーマニア、第2回がチェコ、これからのべる第3回がソ連（第3回世界選手権には期待されながら、試合会場に西ベルリンが予定されたため、政治的理由により棄権）、第4回がルーマニアと東欧圏が圧倒的な強さを見せている。

同じ東欧圏が強いといっても、男子の場合と異なり、ソ連、チェコ、ルーマニア、ハンガリー、ユーゴーといったように数ケ国の間で覇権が動くという形をとっており、男子のようにルーマニア、チェコといった図抜けた宿敵同士の対決という様相は見せていない。

それとともに、男子と異なり、女子の世界選手権は冬季をさけて行なわれているため、この間中止されたことは一度もない。

参加チームは14と大巾に増加！

第3回大会は女子のヨーロッパカップのうえで画期的な大会となった。男子が20チームを前後するチームを集め、ヨーロッパ・カップを行なっていたにもかかわらず女子の1・2回大会は、9チームの参加で、いささか淋しい感をいだかせていた。

これは単に参加チームが増えたというだけでなく、それだけ、各国に普及が進み、レベルがグッとあがった明確な証拠となると考えられる。

初参加はスウェーデン、デンマーク、ハンガリー、オランダの諸国であり、ソ連が復活し、前回と同様、前回優勝のスパルターク・プラーグ・ソコローボが推薦出場となり、チェコから出てきたCKD・プラーグとともにチェコから2チームが出場している。

連続出場は、チェコのスパルターク・プラーグ・ソコローボを筆頭に、ルーマニアのラピッド・ブカレスト、三回連続出場を果したオーストリアのダニュービア・ウイーンがあるだけで、あとは新顔である男子の場合出場チームが常連化していて、出場チームの半数近くが連続出場していることを考えると女子のほうが国内試合においても安定していないか競争がより激烈であると云えよう。

それと北欧の7人制の名門、スウェーデンとデンマークがこの大会から参加して、興味は倍加した

本大会から、決勝のみは1回戦方式になり、大会型式は現在のものと全く同一になった。

強豪順調に勝ち進む

一回戦をシードで進んだ。スパルターク・プラーグ・ソコローボとユーゴーのロコモチーバ・ザグレブを除いては一回戦から各チームは争った。（この大会までは、準々決勝が一回戦となっていて、その前の試合は予選とされていたがこの大会からは、一回戦が設けられ、男子と同様、本大会は16チームによって争われる形をとっている。また男子第5回大会に見られた前年度優勝チームの無条件連続出場は女子では、2・3回大会に適用されただけで、以後中止されることになる）

▽一回戦

FIF・コペンハーゲン（デンマーク）	8—6 9—4	SSC・東南ベルリン（西ドイツ）
FIF・コペンハーゲン2勝		
フォルト・シュリット・ヴァイセンフェルト（東ドイツ）	14—3 8—6	IK・イーメール・ボラス（スウェーデン）
フォルト・シュリット・ヴァイセンフェルト2勝		
ラピッド・ブカレスト（ルーマニア）	16—6 3—2	スパルタク・ブダペスト（ハンガリー）
ラピッド・ブカレスト2勝		
ツルド・モスコー（ソ連）	15—7 11—11	ルフ・ケーニッヒスヒヨッテ（ポーランド）
ツルド・モスコー1勝1分		
ニロス・アムステルダム（オランダ）	8—6 7—6	US・イーブリー・パリ（フランス）
ニロス・アムステルダム2勝		
CKD・プラーグ（チェコ）	9—3 2—2	ダニュービア・ウィーン（オーストリア）
CKD・プラーグ1勝1分		

それぞれ強豪が順当な勝星をあげた。男子の場合と異なり、1勝1敗になるケースが全くなかったことからも、実力差があったことと云えよう。

しなしながら、やはりホームゲームのほうが得点差が大きくなっていることは注目に価しよう。6試合ともすべて同様な傾向が認められた。

FIF・コペンハーゲン、ヴァイセンフェルト、ラピッド・ブカレストが圧倒的な強さを発揮している。

昨年度優勝のスパスタク・プラーグ早くも敗退

▽準々決勝

ツルド・モスコー	8—7 9—8	スパルタク・プラーグ・ソコローボ（チェコ前年度優勝）

ツルド・モスコー2勝

フォルトシュリット・ヴァイセンフェルス	8—8 7—6	CKD・プラーグ

フォルトシュリット・ヴァイセンフェルス1勝1分

ラピッド・ブカレスト	13—8 6—6	ロコモティバ・ザクレブ（ユーゴ）

ラピッド・ブカレスト1勝1分

FIF・コペンハーゲン	17—7 25—10	ニロス・アムステルダム

FIF・コペンハーゲン2勝

FIF・コンンハーゲンを除きすべてのチームは辛勝している。FIF・コペンハーゲンは相手のニロス・アムステルダムの弱体さにすくわれ、二試合とも大量得点をあげ、しかも大差で勝利を握った。

あとの3試合はすべて、僅差で試合が決っている。特にフォルトシュリット・ヴァイセンフェルトとCKD・プラーグの試合は1勝1分だが、得点差は僅か1点になっている。

ツルド・モスコーとスパルタク・プラグーも2勝と勝ち点では大差がついているが、これも得点差は僅かに2点とせっている。

ニロス・アムステルダムを除きこの準々決勝に出場してきた7チームの実力はほぼ同一であったということが云えよう。ソ連、チェコ、東ドイツ、ルーマニア、ユーゴー、デンマークの各国がトップゾーンを形成していたと考えられる。

二試合とも1勝1敗 得失点差で決まる

▽準決勝

ツルド・モスコー	7—10 12—6	フォルトシュリット・ヴァイセンフェルト

1勝1敗、総得失点差19—16でツルド・モスコーの勝利

FIF・コペンハーゲン	11—7 3—6	ラピッド・ブカレスト

1勝1敗、総得失点差14—13でFIF・コペンハーゲンの勝利

さすが準決勝になるとチームの実力差はグッと接近し、両試合とも、それぞれホームチームが勝ち、1勝1敗になり、得失点差で決った。

準決勝に残ったチームは西欧圏が僅かに1、あとは東欧圏が占めた。準決勝はどちらもきわめて緊迫した試合で、後でホームゲームをもったほうがいずれも追いこんでいる。モスコーは3点差でホームゲームに臨み、どんどんと追いつき、ホームゲームを終る時には3点差をつけた。ラピッド・ブカレストも4点差をはねかえすべく追いかけたが、デンマークの守備陣に今一歩のところではばまれてしまった。決勝は前回にはヨーロッパカップに出場しなかった国同士の試合となった。

ツルド・モスコー初優勝を飾る
デンマークは惜敗

▽決勝

ツルド・モスコー	11—8	FIF・コペンハーゲン

決勝はツルド・モスコーとFIF・コペンハーゲンという初登場同士の顔合せとなり、激戦が展開されたが、結局、ツルド・モスコーがリードを続け、優勝をとげることになった。

ツルド・モスコーはシャルヂリス・カウナスと並ぶソ連女子の名門チームであり、ナショナル・プレーヤーも輩出している。

ソ連はこのあと1967・68年両年のシャルチリス・カウナスの連覇という偉業を含め、ヨーロッパカップに3度優勝をとげている。これは女子ヨーロッパカップ史上他のどの国もなしとげていないことである。男子では、FA・ゲッピンゲンの二連覇とvfL・グンメルスバッハの優勝とやはり三度優勝しているのは西ドイツだけである。

女子で西欧圏が強さを見せるのは、この回を含め、デンマークが活躍した年だけである。

このあと4回、5回、6回大会でデンマークが大活躍をする。

ヨーロッパ・カップも今後ますます活況を呈し、試合も激烈さを加えていく。その中で、国内試合の連覇ということだけでも、困難なのに、ヨーロッパカップで上位に進出するのは至難の技である。

本年もすでに試合がはじまっているが、果してどのような結果になるか期待される。（藤本　強）

各地の記録

大崎電気が男女優勝
ともに健斗の学生勢降す

第7回東京都選手権は11月4日から8日までの5日間、駒沢屋内球技場に男子22、女子9チームが参加して開かれた。

学生勢の参加で男子は好内容の試合がつづいたが、ナショナルプレイヤーを揃えた大崎電気が全日本教職員ナンバーワン・東京教員ク、中央大らをおさえ、決勝でも日体大の若さにあふれた攻守をかわして2年連続4度目の優勝を飾った。

女子は準決勝で東京女体大が大崎電気に対し後半18分まで5—3とリードを奪う健斗をみせた。しかし地力に優る大崎は終盤辛くも3点を連取して逆転勝ち。決勝は大崎—三菱鉛筆の顔合せとなり僅かの差で大崎が勝ち2連勝（通算3度目）した。

▽男子準々決勝
大崎電気 16（8—7 8—4）11 中央大
法政大 22（12—7 10—7）14 明星ク
芝浦工大 25（8—5 17—1）6 千代田印刷機製造
日体大 30（13—2 17—6）8 安田生命
▽同準決勝
大崎電気 22（14—4 8—10）14 法政大
日体大 15（6—2 9—4）6 芝浦工大
▽同決勝
大崎電気 9（6—1 3—7）8 日体大

	【大崎】	得	【日体】	得
GK	福本	0	海江田	0
GK	下里	0	大村	0
FP	近藤	1	大川	0
FP	近森	1	笠原	1
FP	飯田	2	亀谷	2
FP	旗野	2	安達	0
FP	東	2	串野	0
FP	平岡	1	中村	0
FP	谷口	0	氷海	1
FP	佐藤	0	松原	0
FP	太田	0	高橋	1
FP	佐々木	0	岩下	3
	9	(0) 7MT (1)	8	

▽女子準々決勝
大崎電気 16（7—4 9—4）8 美和ク
東女体大 14（5—0 9—3）3 菱和ク
東京重機 21（7—3 14—2）5 東京教大
三菱鉛筆 15（6—3 9—1）4 日体大
▽同準決勝
大崎電気 6（1—3 5—2）5 東女体大
三菱鉛筆 10（5—4 5—2）6 東京重機
▽同決勝
大崎電気 6（3—2 3—2）4 三菱鉛筆
▽高校男子決勝
中大附属 13（5—6 8—6）12 神代
▽同女子決勝
小平 6（4—1 2—3）4 桜水商
▽中学男子決勝
深川四中 11—9 深川五中
▽同女子決勝
中央中 12—1 学芸大付属小金井中

麻生A、激戦の末優勝

▼第19回茨城県総合選手権（11月 麻生町・水海道二高）
▽男子準々決勝
麻生A 23—9 竜ケ崎連盟
全石岡一高 15—12 茨城大
自衛隊A 21—10 麻生B
新治ク 13—4 笠間高A
▽同準決勝
麻生A 10—9 全石岡一高
自衛隊A 14—8 新治ク
▽同決勝
麻生A 24（7—12 12—7 : 0—1 2—1 : 2—1 1—1）23 自衛隊勝 田A
▽女子準々決勝
石岡二高 21—1 日立二高
鉾田二高B 9—5 常北高
水海道二高 15—4 笠間高
八郷高A 11—5 麻生高
▽同準決勝
水海道二高 14—2 石岡二高
八郷高A 10—5 鉾田二高B
▽同決勝
水海道二高 10（5—3 3—5 : 1—1 1—1）10 八郷高A 引き分け
抽せんで水海道二高の優勝

倉敷クが2勝で優勝

▼岡山県秋季一般選手権（11月・倉敬商）
▽男子リーグ戦
倉敷ク 18（8—6 10—4）10 津山高専
岡山教員ク 22（11—4 11—10）14 津山高専
倉敷ク 12（7—7 5—3）10 岡山教員ク
【順位】①倉敷ク②岡山教員ク③津山高専

桜台と名女商が快勝

▼愛知県高校新人大会（11月・名古屋）
▽男子準々決勝
桜台 12—7 豊橋工
名城大附 10—6 蒲郡
一宮工 24—16 向陽
松蔭 8—5 中京
▽同準決勝
桜台 14—6 名城大付
一宮工 11—8 松蔭
▽同3位決定戦
名城大付 12（4—4 8—1）5 松蔭
▽同決勝
桜台 19（10—4 9—6）10 一宮工
▽女子準々決勝
名女商 19—3 中川商
西尾 8—5 豊橋商
蒲郡 7—6 松蔭
高蔵女商 19—4 桜台
▽同準決勝
名女商 14—4 西尾
高蔵女商 5—4 蒲郡
▽同3位決定戦
蒲郡 11（6—2 5—3）5 西尾
▽同決勝
名女商 14（6—6 8—1）7 高蔵女商

富士製鉄、大同に雪辱

▼第24回愛知県民体育大会ハンドボール一般（11月・名古屋）
▽男子準決勝
富士製鉄 28—17 蒲郡ク
大同製鋼 29—16 豊橋ク
▽同決勝
富士製鉄 26（13—9 13—6）15 大同製鋼
富士製鉄は初優勝
▽女子決勝
ブラザー工業 39—8 内海高OG

SDPが初の栄冠

▼第1回東京都クラブ競技会（11月・駒沢）＝男子のみ
▽準々決勝
波多ク 22—11 若木ク
大成プレハブ・ク 26—18 早稲田ク
KAC 9—7 戸塚ク
SDP 15—12 早大学院ク
▽準決勝
波多ク 34—9 大成プレハブ・ク
SDP 20—13 KAC

▽決勝
SDP 20（10—9、10—5）14 波多ク

国学院高、海上自衛隊破る

▼第17回栃木県総合選手権（11月 石橋高）

▽男子準々決勝
海上自衛隊 12—9 足利商
馬頭高A 17—13 国学院高A
宇都宮工OB 11—10 球友会
国学院高B 25—12 宇都宮工

▽同準決勝
海上自衛隊 19—10 馬頭高A
国学院高B 24—12 宇都宮工OB

▽同決勝
国学院高B 22（11—3、11—8）11 海上自衛隊

▽女子準々決勝
栃木女高 15—10 小山城南高B
国学院高B 10—2 足利商
馬頭高 8—4 小山城南高A
国学院高A 13—5 足利女高

▽同準決勝
栃木女高 23—1 国学院高B
国学院高A 17—1 馬頭高

▽同決勝
栃木女高 8（4—1、2—5、0—0、2—0）6 国学院高A

一商、山陽女を破る

▼広島県高校選手権（11月・広島）

▽男子準々決勝
呉三津田 7—1 呉商
呉港 13—6 呉宮原
三原工 7—6 呉工
広 13—2 山陽

▽同準決勝
広 13—5 三原工
呉三津田 17—7 呉港

▽同決勝
広 18（8—3、10—7）10 呉三津田

▽女子1回戦（2試合）
呉豊栄 4—0 白木
進徳 11—2 賀茂

▽同準決勝
山陽女 9—0 呉豊栄
広島一商 12—1 進徳

▽同決勝
広島一商 6（3—1、3—4）5 山陽女

竜ケ崎市民選手権開く

▼第3回竜ケ崎市（茨城）市民選手権（10月・竜ケ崎一高）

▽男子決勝トーナメント1回戦
オール米町 16—10 ムサシ・ク
川原代町選抜 15—14 流通経済大

▽同決勝
川原代町選抜 14（7—4、7—6）10 川原代町

▽女子紅白対抗
紅軍 9—6 白軍

土居、新居浜商と接戦

▼愛媛県高校新人戦（11月・今治）

▽男子準々決勝
松山工 9—8 松山南
松山北 10—6 今治工
新居浜工 31—5 新居浜東
新田 22—14 今治南

▽同準決勝
松山北 5—2 松山工
新居浜工 19—6 新田

▽同3位決定戦
松山工 11—8 新田

▽同決勝
新居浜工 14（7—1、7—3）4 松山北

▽女子準々決勝
今治南 6—3 新居浜東
新居浜西 9—5 松山商
新居浜商 5—3 土居
東温 8—7 今治西

▽同準決勝
今治南 5—3 新居浜西
新居浜商 15—1 東温

▽同3位決定戦
新居浜西 6—5 東温

▽同決勝
新居浜商 16（9—1、7—0）1 今治南

山梨総合は塩山商A勝つ

▼第22回山梨県総合選手権（11月 和田町球技場）

▽男子準決勝
塩山商A 13—7 園芸ク
塩山ク 棄権 塩山商B

▽同決勝
塩山商A 20（8—8、12—8）16 塩山ク

▽女子決勝
山梨高A 14（7—3、7—1）4 山梨高B

中学大会記録

▼茨城県総合選手権中学の部（11月・水海道市）

▽男子準々決勝
岩瀬 14—10 結城A
玉造A 18—6 神檜一
新治B 16—4 結城B
千代田A 21—2 玉造B

▽同準決勝
千代田A 13—5 新治B
岩瀬 11—10 玉造A

▽同決勝
岩瀬 15—8 千代田A

▽女子準々決勝
岩瀬 3—2 波崎一
水海道 6—3 結城B
結城A 22—4 玉造
水海道西 10—1 神栖一

▽同準決勝
結城A 16—4 岩瀬
水海道西 12—6 水海道

▽同決勝
結城A 8—5 水海道西

参加校 男子12、女子8

・編・集・後・記・

インカレの成績を入れるため、今回はお手許にお届けするのが遅くなりました。インカレは男子が日体大、女子は東女体大が優勝で幕をとじました。男子は常連が上位を占めましたが、女子は東女体大の初優勝をはじめとして、東京教大が三位に入るという新顔が上位にならびました。喜ぶべきことでしょう。

○……本年もいろんなことがありましたが、暮になりました。本年の大きな大会はあと全日本選抜を残すだけになりました。好試合と多数の観衆が入場することを期待したいものです。

○……一九七〇年を日本のハンドボール界の大発展のきっかけの年にぜひしたいものです。

来年をすばらしい年にしましょう。読者のみなさんにとっても、ハンドボール界にとっても。

新年から本誌にも新鮮な空気をもりこみたいと思います。ここのところ投稿はどうもかたよっているようです。どしどし原稿をお願いします。一月号は休刊とし、二月に一・二月号をお届けます。

（TSF）

訂正

本誌前号「愛知実業団リーグ」記録中次の2試合のスコアが脱けていました。
富士鉄B 16—11 トヨタ車体、富士鉄A 26—3 タヨシ産業

日本協会の住所変更

日本ハンドボール協会の住居表示が45年1月1日から次のように変わります。

東京都渋谷区神南一丁目一番一号

日本ハンドボール協会編
『ハンドボール』
第七十一号
昭和四十年六月七日 第三種郵便物認可
昭和四十四年十一月二十五日印刷 昭和四十四年十二月一日発行
発行所 日本ハンドボール協会
東京都渋谷区…町二五
電話 大代表(467)三一一一
振替東京五八三四八番
編集兼発行人 保坂周助
定価百五十円
(年間購読11回・千二百円)